

孤高の喰種

湊眞 弥生

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

喰種とCCG捜査官という対立構造が複雑に絡み合った現代の東京。

喰種であることを隠してなんとか高校を卒業してから二年。

大学二年生になった比企谷八幡は東京で喰種として生きていた。

そこで知り合った喰種の臓器を移植されて半喰種となってしまう金木研に同じ半喰種として比企谷八幡は世話を焼く。

そんな彼に隻眼の王になれと迫るエト。

色々な思惑が重なる世界で、比企谷八幡は次第に喰種とCCG捜査官の対立構造に巻き込まれていく。

そんな世界で彼の目指すものは。

※注意事項

pixivでも書いている話と同じです

一部文章を付け足したり、文章がおかしいと思うところを修正してからの投稿です
なので更新はpixivが優先になります

東京喰種は原作全巻読破済み。

俺ガイルはアニメ知識とその他ネットで調べた程度の多少の知識がある程度です。

なので、キャラ崩壊とかがあるかもしれませんがご了承ください

文章にも至らない点があるかもしれませんが、その点もご了承ください

タグは一部念の為に付けているものがあります

目次

無印編

1	比企谷八幡という喰種	1
2	マスク作り	12
3	鬼のお面	23
4	逢着	36
5	絶望	47
6	戦う理由	60
7	行方	71
8	出会い	79
9	邂逅	93
10	監禁主の正体	111
11	決意	120

1	再会	157
2	力の差	150
3	弟	143
4	王座	131

無印編

1 比企谷八幡という喰種

喰種。それは人と同じ外見をしていながら人を糧として生きる怪人。

彼らは人間と同じものは栄養にできず、口に入れば酷く吐き気がする程の味がするという。

人間とは違う味覚を有する彼らが唯一口にして栄養に出来るのが人間と珈琲。

その他に彼らには専用の捕食器官である赫子と呼ばれるものが備わっており、それでは人を襲い糧として人間社会に溶け込みながら生きていく。

G。そんな人を襲う喰種から対抗するため組織されたのが喰種専門の捜査官であるCC

喰種は並の兵器では傷付けられないため、喰種の赫包と呼ばれる臓器から作られた対喰種専用の武器を持って彼らに立ち向かっていく。

喰種とCC捜査官の対立構造が複雑に絡み合った現代の東京で、自称ぼっちを貫い

て他の喰種と行動もしない、かといってCCG捜査官を殺す訳でもない一人の喰種がいた。

「あれ？比企谷先輩じゃないっすか！ 何してるんですか？」

「あ？ 永近か。見ての通り、珈琲を片手に読書してるだけだぞ」

本を閉じて顔を見上げる。

東京にある上井大学に通い始めて二年が経過した。

総武校をなんとか無事に卒業した俺はその後、上井大学では高校の頃の過ちを冒して喰種の疑いをかけられないようにするため、率先して人間関係を作ることは無かった。

高校を卒業して二年が経過した今でも雪ノ下との恋人関係は続いているが、卒業して以来会っていない。なので基本的には高校で奉仕部に入る前の時のようにぼつちを貫いてると言ってもいいかもしれない。

そんな俺に大学内で知り合った一つ下の後輩。それが永近英良だった。永近と知り合ってから、俺がこうして大学の敷地内で珈琲を片手に読書していれば話しかけてくる。

そしてもう一人、俺が個人的に目にかける後輩が一人いる。その彼の紹介により永近と俺は知り合う事となった。

「ヒデ、比企谷先輩といたんだ」

「お？ カネキか。お前今日もあんていくでバイトか？」

「うん、この後の夕方からだからもう行くね」

「おう、頑張れよ！ んじゃ、俺行くわ」

一人、眼帯をつけた男子が永近にそう挨拶をすると、永近はゼミがあるからか軽快な足取りで去っていく。

眼帯をつけた彼の名前は金木研。永近と小学生の頃から友人付き合いを築いている彼は、とある一件によってリゼの臓器を移植されて人間から喰種になってしまった悲劇の人物。

俺があんていくに通い詰めてる時に金木研とは知り合った。その時に話を聞けばそういう事情があったらしく、大学も一緒と言うことなので何かと俺が世話を焼いていた。

「あー、カネキ。あんていくに行く前に、ちよつといいか」

「はい、なんですか？」

「大学内で話すことでもないし、歩きながらでいいから」

俺がそう声をかければ、カネキは後ろを歩いて付いてくる。

大学を出て、他愛もない話を交わしながら賑わいを見せる街中を歩いていく。歩きながらも周りに目を配り、白鳩が周りにいないことを確認してから人の目を気にしつつ俺は本題を切り出す。

「お前、あれから食事したか？」

「いえ、まだ…抵抗があるので……」

「……ま、気持ちは分からんでもないが、そろそろ腹決めて食べ。じゃないとお前、永近に手をかけてもおおかしくないからな」

「……はこ」

詳細に話して人間に聞かれれば街中は騒ぎになるので、ある程度言葉を選んで話していく。

言葉を選んで話すのも中々面倒だが、喰種はそうして暮らしていかなければ人間社会に溶け込めない。だからこそ人間が羨ましいと思うのだろう。

手頃な他の喰種がいない事を匂いで確認してからわざと路地裏に入って、人の気配が消えたのを確認してから立ち止まる。

「ま、俺がこう言つて腹決めて食べるんなら世話ないわな。それなら、一つだけ提案出来ることはまだある」

「でも、喰種は人と珈琲以外はダメなんじゃ……」

「そうだ。お前もなんとなく想像はついでんだろ？ 共食いすればいい」

「共食いつて……喰種を食べるってことですか？」

「そうだ。俺なんかは普段からしてる事だ。だから今すぐ食えつて訳じゃないが、選択肢の一つとして考えておけ。まあ、喰種の肉は美味くないけど人を食うよりまだ罪悪感
はマシだ」

「はい、ありがとうございます」

「話は終わりだ。お前これからバイトだろ？ 頑張れよ」

これで食事に困ることなく過ごしてもらえれば良しだが、まだ喰種なりたての身では厳しいだろう。でもこの先、慣れていけばきつと彼ならその選択肢を取るだろう。言わ

なくても気付いたかもしれないが、念の為にという言葉もある。

話を切り上げてから路地裏を出てカネキをあんていくの前まで送った後、俺はそのままの足で20区を出た。

「エト、話ってなんだ」

「来たね、比企谷くん。私からの話なんて、君は薄々分かっているんだろ？」

20区を出てから少し経った頃。話があると言われ廃墟の中に入れば、全身を包帯で巻いてローブに身を包んだ喰種が立っていた。

「またあの話か。俺じゃ有馬貴将は殺れないから諦めろって何度も言ってるはずだが」「でも君、共食い始めてからも結構経ってるんだし、いい線いけると思うんだけど」「何度も言うようだが、俺は人殺しはしない。……例え白鳩であろうとな」

「こちらも薄々分かっていた返事だけど、こうも想定していた通りだと困ったものだね」「隻眼の王の椅子、ねえ……」

「私としては君がその椅子に座ってくれるなら何も言うことはないんだけどね。同じ隻眼のよしみだろう？」 頼むよ」

「はっ、馬鹿言ってるじゃねえよ。俺とお前がいつそんな仲になったよ」

エトと知り合ってから二年ぐらい経つが、俺とこいつは友人という訳では無い。

ただ同じ隻眼だから、というだけでそれ以上の付き合いはない。こうして話と言つて呼び出されて付きまとわれることはあるけれども。

隻眼の王になれと会う度に言われては断っているのだが、中々折れない。そんなに計画とやらが大事なのだろうか。その大事な計画とやらの概要を知らないし、知りたくもないけど。

「それじゃあ、無理矢理にでも連れていくけど、構わないかな？」

「やれるもんならやってみろ。お前じゃ俺には勝てねえよ」

大見栄張つてから右目を赤黒く染めれば相手も右目を赤黒く染めて赫子を出す。

俺は六本の鱗赫だけが、あちらは違うようだ。身体に赫子を張り巡らせて、図体が数倍の大きさにまで膨れ上がっていく。

「相変わらず趣味が悪いな、それ」

「ケタケタケタ、君に言われたくないね」

その凶体からは想像がつかない速度で俺に詰め寄って右の羽赫で俺に切りかかってくる。

それを鱗赫四本で受け止めるものの、身体が押されて少し後退る。そのまま押し切られないようにするため、余った二本のうち一本の触手で俺の後ろの床に刺して押し留める。

なんとか受け止める体勢を作れたので余った最後の一本の鱗赫でエトの右から叩きに行く。

しかし、それを分かっていたかのようにエトは後ろに飛び退いて躲す。

後ろに飛び退いた勢いでグツとタメを作って羽赫で棘を発射させて攻撃。溜めた力をそのまま解放してから俺に距離を詰めてくる。

「相変わらずその凶体でよく動けるな、テメエは」

「あんよがじよーず、あんよがじよーず」

こいつの攻撃を止めるのも一苦勞なので走って逃走を計るが、後ろをピッタリとついてきている。

「ストーカーかよ、めんどくせえなこの野郎！」

「ほらほら、逃げるなよ。私に勝てるんだろ？」

勝てるのは間違いないのだが、それは俺も赫者化すればの話。しかし、俺の赫者化はまだ意識が安定しないので飲み込まれる可能性がある。だからこそ出来ればやりたくない一手だった。

そうなると選択肢はもう逃げに回るしかないのだからこうして走っているが、突き放せる気配がない。

「つのやろ！」

完全なる赫者化は流石に意識が安定しないが、半赫者ならなんとかなると信じて赫子を更に出していく。顔が仮面に覆われたように付き、身体のうちこちに中途半端に赫子

がまとわりついていく。

その中途半端な姿を見て、エトはケタケタと笑う。

「やつと少しは本気になったかい？」

「はあ、はあ、ちよつとだけだ。これ以上は俺がもたねえんだよ」

「理性の化け物がよく言うね」

右腕をこちらに振ってきたのでそれをしゃがんで交わしながら腰にある触手で横薙ぎをすると、ようやく一発だけエトに当たり、身体が少しだけ浮き上がる。

その浮き上がった隙に後ろを向いてから全力疾走をして俺は廃墟から逃走した。

「ちえ、また逃げられちゃった」

「エト、比企谷はどうした」

「タタラさんか。見ての通り、私が一発貰った隙に逃げられちゃったよ。相変わらず逃げ足が早いね、彼は」

「あいつにはもつと強くなってもらう必要がある」

「そうだね、有馬貴将を殺せる喰種は彼しかないだろうしね」

比企谷が去った後の戦いの後で半壊した廃墟の中でエトは不敵に笑う。

「さ、白鳩が来ないうちに撤退しよう。また会いに行くからね、比企谷くん」

2 マスク作り

「20区はほんと平和だな」

土曜日の夕方。俺は暇を持て余していたため暇つぶしに新宿まで出てきて歩いていた。それなら勉強すれば？とかバイトないの？と言われそうだが、勉強はやれる所まではもう終わらせてあるしバイトもしていない。完全にやる事が無い状態。

ではなんで駅前を歩いてたかというのは、誰か知り合いがいればよし、いなくても本屋行ってラノベの新刊を探せればと思ってる行動だった。知り合いと遭遇出来ればいいなんて、高校生の頃の自分からは想像もつかないだろう。

そもそも休日以外に歩いてるのが珍しいくらいだ。しかし20区には何かと気にかけている奴らがいるので、見かけた時に護衛でも出来ればと思ってる行動ではあるのだが。

そうやってなんとなく歩きながら西口から東口に出て散策していると、左目に眼帯を付けた知り合いが駅前で携帯で時間を気にしながら立っていた。

絶賛暇を持て余していた俺からすればこれも何かの縁だろうと思う。まさかここでカネキと会うなんて。例え20区といえど休日でもかもあんでいくと関係ないところ

で遭遇するのだからどんな確率だろう。

「よう、カネキ」

「比企谷先輩、何処か出掛けてたんですか？」

「いいや、暇つぶしに何かあればと思つてぶらついてただけだ。そういうお前は？」

「えーと、トーカちゃんとマスクを作りに行くことになって待ち合わせしてるんですけど……」

「ああ、マスクか。んで、その肝心の霧嶋が来ないって所か」

「はい……あはは……」

頬を掻きながらカネキは困つたように苦笑いを浮かべた。霧嶋は元々どうでもいいやつとは出掛けたりしないし、芳村さんにマスクの店まで案内してあげてと言われたから仕方なく待ち合わせしたつてところか。

マスク、と言われて思い出したことがある。俺は今までCCGと交戦したことがないのでマスクを持っていない。

そもそも普段顔を隠さなきゃならない場合は、パーカーのフードを目深く被るし、いざとなれば赫者化して顔を隠せばいいわけで、必要性を感じなかったのだ。赫者化は本

当に最終手段だから逃走するのに使ったことはないけど。

「よし、暇だし俺もマスク持ってねーから付き合おうわ」

「いいんですか？」

「ま、後はお前の護衛みたいなもんだ。お前、まだ戦い方分からねえんだろ？」

「あははは……」

喰種になりたてで喰種の戦い方のたの字も分からなそうなカネキが心配という意味でそう伝えると、カネキは苦笑いを浮かべた。笑って誤魔化そうとしても無駄だからね。今度扱いてやるとしよう。

そう心に誓った時、後ろから若い女の子の驚くような声が掛かる。

「ひ、比企谷さん!?! なんでここに」

「お、やっと来たか霧嶋。たまたまカネキを見かけたから待ってたんだよ」

「えっ……えつと、比企谷さんも行くんですか？」

「そのつもりだったが……何か都合でも悪かったか？」

「いや、別にそんなことはないですけど……」

霧嶋董香。清巳高等学校の普通科に通う現役の女子高生で、あんでいくの看板娘。霧嶋と初めて会ったのは今から一年前にあんでいくで俺が客として来た時だった。

何回かあんでいくに通ううちにすっかり懐かれてしまつて、今では尊敬の念を抱かれていますようにも見える。俺は特に何かをした覚えは全くないから懐かれる理由が分からないけど。…あれ？それで言つたら一色もそうじゃね？とか思い出したが、そもそもあいつは俺を使い心地のいい駒みたいなものと思つてるだろうしやっぱり違うなど勝手に一人で納得する。

「あれだろ？ マスクつてあそこだろ？ 行くぞ」

「あ、待つて比企谷さん！ おいクソモヤシ！ テメエも早く来い」

「あ、うん」

俺が先頭で歩き、その後ろを霧嶋とカネキが着いてくる。

にしてもこの二人、仲悪いのか？ つて思う程に空気がギスギスしている。こちらの居心地も悪いつたらありやしない。

「そういえば比企谷さん」

「なんだ？」

「今、20区に白鳩が二人来てるの知ってます？」

「いや、知らん。なに？ ついに来ちゃった？」

「ヨモさんがたまたま見つけたって」

「ああ、なるほど」

20区にいたという二人の白鳩。

20区はあんていくが喰場の管理をしているおかげで他と比べると平和な区だが、ここに二人の捜査官が来たとなれば誰かを追ってきたのだろう。

あんていくには結構通っているから分かったことだが、最近は笛口親子があんていくにちよくちよく出入りをしている。それを察するにその捜査官は笛口親子を追ってきたのだろう。

俺はまだ出くわしてないからなんとも言えないが、リョーコさんとヒナミは人殺しをしない喰種だ。だからそんな大した捜査官ではないだろうと勝手に推測を立てる。

しかし、念には念をとという言葉もある。しばらくはあの二人の護衛を陰ながらしておく。

俺がそう考えているその後ろでは霧嶋とカネキが何やら話をしている。

「ねえ、トーカちゃん」

「……なに？」

「比企谷先輩ってその……やっぱ強いなの？」

「はア……アンタ知らないの？比企谷さんは人殺しが嫌いだから中々戦わないけど、凄く強いよ。アタシなんか足元にも及ばないし……」

「トーカちゃんで勝てないって……。僕、凄い人と知り合ってたんだ……」

そんなに強いんだという尊敬の眼差しを比企谷に向ける金木。そんな真っ直ぐな眼差しをぶつけられると照れるからやめて。

そう話しているうちに例のマスクの店まで到着する。コンコンと霧嶋が店の扉の取手でノックして店内に入る。店の中は相変わらず壁にマスクが掛かってたり、ガラスケースに飾られたりと質素な作りをしている。

「ウタさーん？ いますかー？」

「いねえな、ウタさん」

「寝てんのかなアもう……」

「いや、寝る時間にはまだ早いだろ」

霧嶋の呼び掛けにも反応無し。ウタさんを探すために店内を回るが、相変わらず色々な種類のマスクが店内に飾られていた。

霧嶋と俺で店内を見ていると、カネキが突然叫び声を上げた。叫んだ方に振り返ってみれば、カネキがひっくり返っててウタさんが上から覗き込むように立っていた。

そんなウタさんの行動に霧嶋が思わず突っ込む。

「……………何やってるんですか……………ウタさん」

「……………ビックリさせようと思って……………」

ビックリさせようと思って隠れるとかお茶目かよとツッコミを勝手に心の中でして、俺らはウタさんの作業台まで移動する。

作業台まで移動してから霧嶋がカネキにウタさんの紹介を始める。

「喰種のマスクを作ってくれる人でウタさん」

「カネキです、よ……よろしくお願いします……」

ウタさんの見た目に怯えているのかソワソワしながらカネキは自己紹介をする。

そんなに怯える必要はないと思うのだが、カネキは何処かビビりな所があるから仕方ないのかもしれない。

「きみが芳村さんが言ってたコか……比企谷さんは今日どうしたの？」

「あー、俺もマスク持っていないんで……丁度いい機会だし作ってもらおうかと」

「……うん、いいよ。カネキさんの後で寸法測るから……店の中で待ってて」

ウタさんに言われたので店内のマスクを眺めながらどんなマスクがあるのかを見る。
回る。

俺が店内を見て回っている間はカネキと霧嶋がウタさんと世間話を交えていた。恐らくはさっきの捜査官が来た云々の話であろう。

その後はウタさんがカネキに色々質問をして寸法を測っていた。

しばらく店内でマスクを見ながら待っているとウタさんから声が掛かったのでそちらに足向ける。

「お待たせ……比企谷さん」

「いや、そんなに待ってないからいいですよ」

「いくつか質問。アレルギーはある？」

「いや、ないです。フルフェイスかヘルメットかは任せます」

「そう……そういえば、比企谷さんってカネキさんと同じ隻眼だったっけ……」

「そうですね。アイツと違って、赫眼の制御は出来るから別に隠してないですけど」

右目を赤黒くさせると、それを見たウタさんは何か思いついたのかメモを取っている。

その他にもあれこれと俺にも色々質問をしながら顔の採寸をするが、マスク作りってこんな感じなんだな。作ったことがなかったので、いい経験だと思った。

「……比企谷さんのものも、マスク出来上がったらあんていくに届けとけばいい？」

「はい、あんていくに取りに行くんでそれでお願います」

採寸が終わり立ち上がると、ウタさんが後ろから声をかけてくる。

「カネキさんやトーカさんもそうだけど……何処か危なっかしいところあるから……比企谷さんが守ってあげてね。あんていくにいれば大丈夫だとは思うけど……」

「はい、そんな時は俺が守ります。んじゃ、これで」

店を出ると外はすつかり暗くなっていて、街灯があちこちと点灯していた。路地を歩きながらも俺たち三人は会話をしながら駅に向かって歩いていく。

「比企谷さん、マスク持ってなかったんですね」

「まあ……必要性を感じなかったからな。ほら……俺は人殺しとかしないから捜査官にも目をつけられたこと未だにないし」

人殺しは……絶対にしないと心に決めている。何故かと問われれば、母がそうだったからとしか言えないが。

「あのー……ところで、あのマスクって何に使うんですか……？」

俺と霧嶋が話している後ろからカネキが恐る恐るマスクの用途の質問をしてくる。その間に霧嶋が、はア？と怒りの声を上げる。

「アンタ知らないで来てたの!？」

「まあまあ。芳村さんは霧嶋が説明してくれると思っただろ。マスクつーのは、喰種捜査官から自分の顔を隠すために使うんだ」

霧嶋の代わりに俺がカネキに質問に答えると、頭の上でクエスチョンマークを浮かべている。この様子だと、なんで隠す必要があるのかイマイチ分かっていないらしい。

「なんで隠すためにマスク付けるんですか……?」

「馬鹿、顔と正体が一致してたらヤバイでしょうが」

少しは頭使えよと愚痴を洩らす霧嶋を俺が宥め、カネキは苦笑いしている。こんな日もたまには悪くない。

願わくば、この平和が、いつまでも続けばいいんだがな……。

3 鬼のお面

夜の公園で、スーツのジャケットを脱いで汗水を垂らしながら懸命にスコップで土を掘り返す男がいた。

ワイシャツの上から見ても分かる程の筋骨隆々のガタイの良さ、綺麗に切り揃えられた髪。彼の名前は亜門鋼太郎。CCGに所属するアカデミーを卒業してからさほど経っていないまだまだひよつこの一等捜査官。

そんな彼がなぜ夜の公園で汗水を垂らしてスコップで土を掘り返していたのか。その理由は一つだった。

「見つけた……！ 696番のマスク……！ やはり723番は喰種だ……！」

大学の講義が午前中で終わり、今日は何をしようかと考えながら大学の敷地内のベンチに座って珈琲を飲みながら読書をする。文章に目を滑らせていると雪という文字が

目に映る。雪という文字を見て、最近は意外とバタバタしていてアイツに電話を暫くしていなかった事を思い出した。

そうと決まれば早いもので、アイツも多分今の時間は講義中では無いだろうと信じて番号を呼び出すと、ワンコールで繋がった。

「久しぶりに電話をしてきたかと思えば、昼間からどうしたのかしら？ 比企谷くん」

「いやア……今日の講義が終わって暇で読書してた時に雪って文字を見てな。んで最近電話してねえなって思い出したから掛けたんだが……今都合悪かったか？」

「悪かったら電話に出てないわ。それで、元気にやっているの？ 怪我などはしてない？」

「してないしピンピンしてる。俺の生命力はゴキブリ並だからな」

「そう……。気持ち悪いわね、死んで頂戴」

「お前なあ……俺、一応まだお前の彼氏なだけど……」

「高校を卒業してから、私や由比ヶ浜さんにさえ顔を見せに來ない彼氏なんて死んで当然ではないかしら？」

「いちいち痛いところを突いてきやがる上に毒が凄いのなんの。しかしこれが雪ノ下

雪乃であり、俺の愛している女なのだから、俺も中々の変態なんじゃなろうかと思う。

「しかも、大学生になってから、貴方の高校生の頃に仲の良かった彼等にさえ会っていないんじゃないの？」

「……まあな。あれから総武に通ってたヤツらの誰とも会ってないな」

「全く……。呆れた男だわ。姉さんも比企谷くんが卒業してから会ってないそうだし、貴方のこと心配していたわよ」

「雪ノ下さんが？ 馬鹿言うな、あの人の場合は玩具がいなくなったからつまんないとか、そんな所だろ」

「ふふっ、そうかもしれないわね」

くすくすと電話越しに雪ノ下の笑い声が聴こえる。その様子が今でも目に浮かぶようだった。出来ることなら会って抱き締めたいのだが、俺は喰種であり雪ノ下は人間。

俺が雪ノ下の傍にいれば、それだけアイツを危険な目に合わせてしまうかもしれない。俺の愛する女が俺を庇って喰種対策法に引つかかるのではないかと一度気になりだしたら、俺にはそんなこと我慢ならなかった。だからこそ、大学も東京の上井大学までわざわざ受験して、誰にも通う大学を告げずに上京したのだから。

「……それにしても、私たちがあの学校を卒業してからもう二年が経つのね……。早いものだけ……」

「……ああ、そうだな」

「比企谷くん……貴方に会いたいわ。会って思いつきり抱き締めて、その温もりを感じたい……」

「……そのうち……そのうち顔出す。そんな時は……連絡する」

「ええ、待ってるわ。……お願いだから死なないで頂戴ね。貴方が死んでしまったら……私は……」

「死なねえよ……。お前も弱くなったな」

「誰のせいも教えてあげてもいいのよ？ 一晩きっちり使ってね」

「勘弁してくれ……。それは俺が死ぬ」

「冗談よ。それじゃあ、私そろそろ行かなければならないところがあるからもう切るわ」
「おう、気をつけてな」

「そつちこそ、気をつけて」

携帯から通話が切れた音が耳に鳴り響いた。

久々に聴いた雪ノ下の声は相変わらず凜としていて、とても透き通るような声だった。

「……俺もそろそろ行くか。今日はあんていくで珈琲でも飲むか……」

開いたままだった本に葉を挟んでから鞆にしまつて俺は大学の敷地を出た。大学の敷地を出てから暫く歩いていると空が曇り始めて急に雨が降り出す。

「勘弁してくれ……。今日降るなんて思つてなかったから傘なんて持つてきてないぞ……」

愚痴を零しながら喫茶店あんていくに向かつて走り出す。少しでも雨で濡れるのを嫌うように。

走り始めて数分。あんていくのすぐ傍に立ち並ぶ商店街の近くに來た所で周囲が少しザワついているのに気づいて思わず立ち止まる。

立ち止まつて周囲の人の話している会話を聴く為に耳をすませた。

「まさか、あんな可愛い親子が喰種だなんてなあ」

「ほんとに人間そっくりだったなー、マジでビックリしたわ」

可愛い親子……喰種……。

嫌な予感がして走り出す。走り出してから気づいたが、俺はウタさんが作ってくれるマスクをまだ持っていない。だがそれも無理はない。採寸をしたのはついこの間の事だから。

このまま向かえば、捜査官に俺の顔を見られるのは必然のこと。しかも最悪なことに今日はパーカーを着ていないのでその場しのぎの顔隠しも出来ない。

走りながらも何かないかと鞆を漁る。鞆を漁っているとプラスチックの何かが手に当たった。それを少し乱暴に鞆から引っ張り出すと、そこにはお祭りの屋台で売っているような、戦闘したら耐久性が心配になるような二本の角が付いたよくあるような鬼のお面。屋台のお面という事もあり目の部分は両方とも空いていて、赫眼を発現させれば捜査官に自分が隻眼であることがバレるのが分かりきっていた。

最近祭りに行った記憶はないし、屋台で買っ物をした記憶もない。恐らくずっとこの鞆に入っていたのだろう。何故こんなのが鞆に入っているのかはよく分からないが、今は時間が無い。

「迷ってる時間はねえか……! 頼む、間に合ってくれ……!」

間に合えと祈りつつ、その鬼のお面をつけて走ると、血だらけで座り込んだリョーコさんに二人の男がいたのを確認する。

リョーコさんの前に立っているその男二人は手にクインケと呼ばれる対喰種用の武器を持っていた。状況を見るからに白髪でヒョロヒョロな身体の捜査官が今からリョーコさんのトドメを刺そうとする場面だった。

「せめてもの情けだ、辞世の句でも聞いてやろうか？」

「その必要はねえな」

後ろからジャンプして捜査官を飛び越えリョーコさんの前に着地する。捜査官の男二人は頭上からいきなり現れた俺に対してすぐに警戒心と敵意を剥き出しにして此方を睨み付けた。

「局内のリストにない顔だな」

「そりやそうだろうな。捜査官の前に立つのはこれが初めてだからな」

「ふん、喰種^{クズ}が一匹増えようと状況は変わらんさ。お前たちはここで死ぬのだから」

今までは箱持ちの捜査官を見かければすぐにその場から離れて接敵しないように心掛けていたので、俺の事を知っているのは喰種のみ。だからこそ目の前にいる捜査官が俺の事を知らないのは必然のことだ。

「やれるものならやってみろよ、人間風情が」

軽い挑発をしてから赫眼を発現させて様子見で腰部から鱗赫を4本だけ露出させる。目の前の捜査官は見ればまだ若いし20区を探索するぐらいだからこれで十分だろう。俺が赫眼で右目だけ赤黒くさせたのを見て、白髪の男は表情が変わる。

「見たことの無い隻眼の喰種……亜門くん」

「はい」

「どうやら私たちはとんでもない大物を釣り上げたかもしれないぞ」

「みたいですね。とんでもない威圧感を感じます……真戸さん」

相手の二人もクインケを持ち直し、此方に向き直る。相手も様子見をしているのかかかってくる気配がない。

「どうした？ 来ないのか？ こっちはわざわざ待つてやつてるんだ。少しは退屈しのにぎになってくれよ」

「調子に乗るな、喰種クックスの分際で！」

また軽く挑発をすると、若い男の方が甲赫のクインケを振り下ろしてくる。

それを赫子二本で受け止めたが、甲赫を使っている割には軽い。やはりこんなものか。

それを弾き返してから、腰から露出させた触手で若い方の捜査官が手に持っている甲赫のクインケを叩きに行こうとすると、その後ろから蛇腹が伸びてきて俺の赫子を切り裂かれる。

切り裂かれた赫子を再生させてから、鱗赫でいつでも弾くことが出来るように体勢を整えたところで、白髪の捜査官がゆっくり口を開いた。

「喰種にこんなことを尋ねるのはあれだが、一つ聞かせてほしい」
「……なんだ？」

「お前は隻眼の梟と面識はあるか？」

「ある、と言ったら？」

「そうか……。ならば見逃すわけにはいかない……。な！」

手に持っていた鱗赫のクインケで俺の横からその蛇腹で斬りかかってくる。

それをしゃがんで躲すと上から若い方の捜査官が甲赫のクインケで俺を叩き潰そうとしていたので、それを受け止めてから上に弾き返す。

「貴様…何故まともな攻撃をしてこない？ 私たちを舐めているのか？」

先程からのやり取りで相手は俺の戦い方を察したようだった。

俺は例え白鳩であろうと人殺しはしないと自分に誓っている。故に致命傷が入るような攻撃はしない。だからこそ武器だけを狙って無力化を測る。それが俺のやり方。

強いて言うなら、捜査官を相手にするのは初めてだから手探り状態で戦っている。そこにつけいられる隙があるかもしれないぐらいだが。

「はっ、勘違いするな。俺は人殺しはしねえ主義なんだよ。……例えば白鳩だろうとな」
「まるで俺は人間だとしても言うつもりかね？」
「だとしたら？」

俺がそう答えると、ガリガリの捜査官は右目を見開いて叫ぶ。

「くだらないなア！ 喰種^{クズ}はどう足掻いたところで人間にはなれないというのに！」

「勝手に言ってる。俺はこのやり方を変えるつもりはない。お前らと遊ぶのはもう終わりだ……ここらで撤退^{クズ}させてもらう」

「逃がすと思っただか、喰種^{クズ}め！」

しなる蛇腹を上から叩き込もうと上から振られるが、先程切り裂かれたのを加味して鱗赫を三本を一つの太いロープのように束ねてから受け止める。

相手の棘が付いたしなるクインケに赫子の鱗をガリガリと削られる。前で鱗赫を対応している後ろから大振りの甲赫を振られていることに気配で察知する。それに対しては新たに腰部から鱗赫を出すことで対応。残りの余った赫子でぐつたりと倒れてい

るリョーコさんを優しく持ち上げた。

撤退する準備が整った所で撤退するために鱗赫で捜査官の二人の足を払って転ばせる。

相手が転んだ隙にリョーコさんを赫子で抱えたままジャンプして俺は近くの建物の屋上から屋上へと素早く移動してあんでいくを指し撤退した。

一方、比企谷が撤退したその場で捜査官の二人は先程の戦闘での振り返っていた。

「真戸さん……笛口親子共々、逃がしてしまいましたね……」

クインケをアタツシケースに戻して、そそくさと傘を拾い上げてから二人は支局に向かって歩き出す。

「戦ってみて分かった事だが、奴はかなりの大物だ。生きていただけでも幸いだよ、亜門くん」

「そんなにヤバいやつには見えませんでした……」

「最後の瞬間、奴は鱗赫を新たに発現させた。それを見るに、だいぶ手加減されていたようだ。レートはそうだな……少なくとも推定S+はある」

「俺がもつと強ければ……」

「仕方ないさ。何せ奴は隻眼だったからな。やれやれ、とんだ大物を釣り上げてしまった。この事は帰ってきつちり本局に報告だ。鬼の面を付けた隻眼の喰種が現れた、とね」

しとしと雨が降る中でやる事は山積みだと呟いてから、二人はその場を離れた。

4 逢着

二人の箱持ち捜査官からなんとか逃れてから俺はリョーコさんを抱えてあんにいくに逃げ込んだ。

店内に入ると業務をしていた小間さんと芳村さんが迎えてくれたが俺の腕の中にいるリョーコさんを見て表情が険しいもの変わる。リョーコさんの怪我の具合を軽く見てから芳村さんが二階の部屋に案内をする。

リョーコさんをソファに寝かすと芳村さんはすぐに俺を部屋から追い出したが、芳村さんの方が適切な処置が出来るだろうから当然の判断だろう。

その後は俺は芳村さんに言われたものを取ってくるぐらいの手伝いしか出来なかったが、それでもリョーコさんを救えるならと使いつ走りを引き受けた。

まだ手伝いがあるかもしれないと部屋の前で立っていると、暫くしてから扉が開き芳村さんが出てくる。

「ひとまず笛口さんは無事だ。比企谷くんのおかげだね。ありがとう」

「いえ、リョーコさんが無事なら良かったです」

「とりあえずこの後のことは明日、落ち着いて話そう。トーカちゃんも試験が終わるから明日からまた来るはずだ」

「俺は皆と少し仲がいいくらいのこと……あんていくに通っているただの客ですが……いいんですか？」

「もちろん。比企谷くんはもうとつくにあんていくの仲間だよ」

「……ありがとうございます。とりあえず、今日は帰ります」

部屋を出てから下の階に降りると、今帰ってきたであろうカネキとヒナミが雨でずぶ濡れになった身体で此方を見ていた。それから業務をしていた小間さんも心配そうな瞳でこちらを見ている。それだけリョーコさんのことが心配なのだろうという事が窺えたのでそれに応えた。

「とりあえず……リョーコさんは無事です」

「それなら良かった。カネキくん、ヒナミちゃんもだけど、体を拭いといで。そのままじゃ風邪を引いてしまうよ」

「はい、そうさせてもらいます……さ、行こうヒナミちゃん」

ヒナミを連れてカネキは二階に上がる。小間さんは平常を装って業務をしているが心配しているからか、そわそわしたような様子だった。

「じゃあ……俺帰るんで……また明日来ます」

「オーケー、じゃあまた明日。比企谷くん」

「……はい」

明日の話し合い……昨日起こったことは正直に話した方がいいだろう。あんていくの皆に迷惑をかけない為にも。

握り拳を作つて思わず力むと、手のひらが少し切れたのか、一雫ほどの血がアスファルトの地面に流れ落ちる。

その翌日の午後四時頃。あんていくには霧嶋を除くあんていくのメンバーが集められていた。

「この後のことを話すために今日は皆に集まってもらった。笛口さんの事とか、この後の事とかをね」

「とりあえず、昨日の状況をまず当事者の俺が話します」

そして、少しずつ昨日のことを語り出す。俺が来た時点でリョーコさんがボロボロだったこと。捜査官が四人は確認できたこと。そのうちクインケを持っていたのは二人であったこと。そして……俺の隻眼がバレたこと。

「比企谷くんの隻眼が相手に伝わってしまったか……」

「まあ……今まで捜査官にバレるのは避けたかったんで、見ても顔を隠して接敵しなかったんですけど……昨日はパーカーじゃなかったのと、顔を隠せるものが鞆に入ってたこれしかなかったもんで……」

そう言って鞆から取り出したのは昨日付けていた鬼のお面。昨日の戦闘では傷付けられずに済んだのでなんとかあったが、耐久性は相変わらず弱い。

「それでも、比企谷が介入していなかったら笛口さんは確実にやられていたから……仕方ないだろう」

「そうよ、だからあまり自分を責めないで。私たちは気にしていないから」

ポツリ、と四方さんがそんな言葉を洩らし、入見さんが俺を慰める。

「問題なのはこの後の事だろうか？ 比企谷くんが相手にどう伝わったかだ」

「そうね……隻眼である喰種が現れて、尚且つ軽くあしらわれた、と思ってるんでしょう」

小間さんはこの後のことを見据えて話し、入見さんもそれに頷く。

そう、問題はこの後だ。俺が間に合っていないければ20区に配置された白鳩は変わらなかつただろうが、俺が介入した事によりそれがまた分からなくなつたのだ。入見さんや小間さん達が話しているのを黙って聞いていた芳村さんがゆっくり口を開いた。

「比企谷くん、昨日使った赫子は鱗赫であつて羽赫は使っていない。そうだね？」

「そうですね。リョーコさんを守りつつ相手を致命傷に至らしめないよう相手をするのは鱗赫じゃないと出来なかつたんで……。羽赫を使った戦闘は先手必勝、短期決戦。この二つが揃つて初めて有効的に使える赫子なんで……」

鱗赫は再生能力に優れていて手数や攻撃力も十分な赫子だ。羽赫は攻撃のバリエー

シヨンも広く、遠距離も近距離もできるので攻撃にかなり特化した赫子。その代わりにRc細胞を放出し続けるという性質上、消耗が激しいので長い戦闘は不向き。そのため鱗赫も持っている俺が羽赫を使う機会はとても限られる。

「あまり危険な存在だと思われなくなかったんで鱗赫四本で対処してたんですけど、咄嗟に自分の身を守るってことで五本目出しちゃったんで……相手にはまだ余力があるとは見られてると思います」

「二種持ちというのもバレていたら危なかっただろうね。とはいえ、比企谷くん……特等捜査官が出てくるのは覚悟しておいた方がいい」

「……やっぱりそうですか」

特等捜査官。喰種捜査官の階級で一番上。つまり、現場で喰種と戦闘する捜査官の中では一番強い人ということになる。

それだけ、俺は危ない橋を渡ってしまったと芳村さんには見えているのだろう。

「でも笛口さんを助けられたのは不幸中の幸いだよ。暫くの間、笛口さんはあんていくで匿うつもりだ」

「いや……リョーコさんは俺が守ります」

「比企谷くん一人では辛くないかい？ 何かアテがある？」

「まア……あるにはあります。……あんまり頼りたくない相手ではあるんですけどね」

一人だけ、いや正確には一組織だけアテがある。その組織は俺を欲しているし、俺が困っていると知ったら力を貸してくれるだろう。匿う代わりに条件を付けられそうではあるが。

しかしこれもリョーコさんとヒナミを守るためと思えば安い代価と言えるだろう。それにあの組織はあんていくとは比較できないほどに大きくなってきているし、なによりもあいつが居る。

「リョーコさんが回復したら俺は笛口親子を連れて20区を出ます。皆さんに迷惑はかけられないんで……」

「決意は……固いようだね」

俺の表情を見て芳村さんも頷く。それに連動するように部屋にいる皆が一斉に俺の方を見る。芳村さん、四方さん、小間さんに入見さん。そして、カネキ。

「もう少しの間だけ、世話になります」

「何か困ったことがあったらいつでも言ってくれ比企谷くん。この魔猿がいつでも力を貸そう！」

「小間くんだけじゃなく、私もね」

小間さんも入見さんもそうだが、本当にあんていくの人達はいいい人が揃っている。これなら、カネキの事は何も心配せず出ていける。

この後、芳村さんは下の階に降りて霧嶋を連れてきてから今起こった話し合いの結果を話した。霧嶋があんていくの皆が居ればなんとかなると強く反発したが、俺が迷惑をかけたたくないと話すと何処か寂しそうにしながらも分かってくれた。こうしてあんていくでの今後についての話し合いは終わった。

リョーコさんは一命を取り留めたばかりで寝たまま目を覚ましていない。ヒナミも母親のリョーコさんの傍で一緒に寝ている。今日はもうやる事が無い。ひとまず家に帰るためにあんていくを出ようと階段を降りて扉に手を掛ける。そのまま出ていこうとしたところで後ろから芳村さんに待ったと声を掛けられ振り返った。

「比企谷くん、君に渡す物があつた」

「渡す物……?」

「これだよ」

そう言つて取り出したのは、一つのマスク。

広げると、鬼のお面にも似ているようで似ていない真つ黒なフルフェイスのマスク。両目の部分はくり抜かれて俺の隻眼が分かるように作られたそのマスクは物語とかに出てくる悪魔に似ているような形状をしていた。

「……なんですか? このマスク」

「今朝、ウタくんが君のはすぐにインスピレーションが湧いたからすぐに出来たと言つて持ってきたんだよ。カネキくんのをまだ仕上げてないからと帰ってしまったけどね」

「ああ……ありがとうございます。じゃあ、今度こそ帰ります」

「うん、またおいで。いつでも歓迎するよ」

ついド忘れしていたが、マスクの採寸をしたんだつた。リョーコさんの事が心配で頭からすっかり抜けていた。にしたつて趣味悪いマスクだこと。別に構いやしないけど。

マスクを受け取って今度こそあんでいくを出してしばらく歩くと、数人が俺を付けていることに気づく。その様子を見るからに人気がない所に行くのを待っているようにも見た。俺は付けてきているのは白鳩だと当たりをつけて路地に入ってから貫つたばかりの趣味の悪いフルフェイスのマスクを付けてから振り返って隠れているであろう人物に向かって叫ぶ。

「おい、俺の事つけてるのは分かってたんだ。出てきたらどうだ？」

「……バレたか。それなら仕方ない」

さあ、その顔を見せてみる。どんな特等捜査官が来たんだと振り返ると、そこに立っていた人物は。

「……待機」

「……おいおい、冗談キツイぞ。いくら特等の顔を知らん俺でも知ってるぜ、お前の事は……。なんでここにいるんだよ」

そこには絶望的すぎる人物が立っていた。

「……少し、興味があつたから会いに来た。新たに発見された…隻眼の喰種に」
「CCGの死神……有馬貴将……こりや、本気出さないと死にそうだな……」

会ってしまったが最後。その喰種は必ず命を落とすとまで言われ、恐れられている無敗の捜査官。有馬貴将がアタッシュケースを持って悠然とそこに立っていた。

5 絶望

笛口親子の騒動の後。局員達もそろそろ退社するような時刻。そんな時間に本局宛に真戸呉緒上等捜査官からの報告書が届いた。

この時間になんだと局長の和修吉時がその報告書を手にとって読んでみれば、緊急度の高い報告が上がってきていてその報告書にはこう記されていた。

『20区にて喰種容疑者と思われる対象を捜査していた際、局内の資料に記されていない鬼の面を付けた鱗赫を保持した隻眼の喰種と交戦。亜門一等捜査官と共に交戦するが、軽くあしらわれた上で対象と共に取り逃がす。推定レートS+以上と思われる』

この報告を受け、これは緊急の対策を取らねばなるまいと和修吉時は判断を下し、特等捜査官に明日本局に出勤するように連絡を入れる。

そして、その翌日の朝。招集をかけられて出勤してきた特等捜査官が一同を介した。

「いわつちよも呼び出しされた？」

「うむ」

「一体なんだろうねえ、今回は」

最初に口を開いた人当たりの良さそうな男、篠原幸紀。不屈のシノハラとも呼ばれる程の特等捜査官。その篠原の会話に頷いたのは黒岩巖。どちらもCCGが誇るベテランの特等捜査官。

「有馬くんも呼ばれた？」

「はい、緊急を要すると」

白髪に眼鏡をかけてコートを着ている男。この男こそ喰種に最も恐れられている特等捜査官。通称CCGの死神とも呼ばれ、未だ無敗の捜査官。有馬貴将。

「一体なんだってんだ、隻眼の鼻でも暴れてんのか？」

愚痴を漏らすのは対策局Ⅱ課で指揮官として作戦の立案から指示出しまで行うことを主な仕事としている特等捜査官。丸出斎。

あと二人、田中丸望元と安浦清子を含めた計六名の捜査官が招集されて局長の待つ部屋に入った。

部屋に入ると和修吉時ともう一人、真戸呉緒がその部屋で佇んでいた。これから行うだろう会議の場において階級的にも相応しくない人物が部屋にいることに丸出が苦言を呈する。

「吉時さん、なんでそいつがここにいるんですか」

「丸、これにはきちんとした理由がある。特等の諸君、特等会議がある訳でもないのに急な呼び出しに应じてもらつてすまない。腰掛けてからでいいから、まずはこれを見てほしう」

局長の吉時に促されて集まった特等捜査官達は席に座つてから吉時が差し出た一枚の紙を手に取り目を通した。差し出されたその紙は昨日、真戸呉緒が提出した報告書。その報告書を読んで最初に言葉を漏らしたのは対策Ⅱ課で指揮を務める丸出だった。

「鬼の面を付けた隻眼、ですか……」

「そうだ。まだCCGでも交戦したこと無かつた新たな喰種だ。今回はこれの対策を

考えるべく来てもらった」

このクソ忙しい時期にめんどくせえやつが現れたと丸出がボヤク。

「困ったね、こつちも色々忙しいのに」

「うむ」

丸出の発言に頷くように困った表情を浮かべて頭を掻き耨る篠原とただ腕を組んで頷く黒岩。

「この報告書を提出した真戸呉緒上等捜査官には、昨日の様子を詳しく話してもらおうべくここに呼んだ。話してもらえるか」

局長の吉時が真戸に話を振ると、彼は頷いてからゆっくりと口を開いた。

「いいでしょう。まず昨日、私とパートナーの亜門くんで喰種容疑者の笛口親子を追ってました。それを追い詰めた時に介入してきたのが、この鬼の面を付けた隻眼の喰種。

赫子のタイプは鱗赫であり、戦闘中には五本まで赫子の発現を確認。しかしまだ実力を隠していると思われる。というのもその隻眼が鱗赫の五本目の出した状況というのが、私のクインケを鱗赫三本で食い止めて残りの一本で笛口を抱えて逃げる体勢を取っていた際に亜門くんを背後を取られたことからですね。結局そのまま私と亜門くんを軽くあしらって逃げられてしまいました。私の現場の経験から、推定S+以上のレートはあると判断し報告書を提出。そして今日になります」

「ありがとう。20区はまだ平和な街だが、そういう訳で隻眼の梟のように今後我々の前に立ち塞がる大きな壁となるだろうこの新たな隻眼は対策急務と判断をしたので諸君には集まってもらった」

話を聞いて、とても面倒くさそうな表情をしながら丸出が考えを話し始める。

「今まで現場で務めてた経験から発言させてもらうと、コイツは赫者か半赫者になってもおかしくねえな。そうなってくると、レートは恐らくSSはあると俺は判断する」
「しかも確認できたのが一回だけなのを考えるに、日常生活を余程上手くやり過ぎたから力を付けてたって所かなあ。こりや参った、アオギリの活動も過激になってきてるというのに……」

「しかもコイツがアオギリと手を組んでみる。いよいよあの組織が手に負えなくなるぞ」

「もしかしたら既に組んでいるかもしれないしねえ……」

丸出の考えに乗っかるように篠原も発言をして頭を抱える。

交戦した回数がたったの一度、それも昨日であり、活動場所も把握できていないことから今から捜査するのは困難を極めている。

それに加えて、CCGは今現在活動が過激になつてきている喰種組織のアオギリの樹とほぼ睨み合い状態。

そんな状態の中、確信的な情報がないのに鬼の面を付けた隻眼の喰種討伐に大部隊を動かせば、たちまちアオギリの樹に付け入られてしまう。そのため余計に頭を抱えていた。

そんな皆が頭を悩ませる中、今まで黙っていた有馬貴将がポツリと発言をする。

「それなら……自分が20区を少し探索してきます」

「それは構わないが……その間24区はどうするつもりだ？」

「そんな大勢いららないだろうから……平気です」

「そうか……。それなら今回の一件、ひとまず有馬特等に任せる」

有馬貴将の提案に局長が折れる形で特等会議はそのまま終了する。

会議が終了し、全員が部屋から出ていく中で有馬だけはその場で少し考え事をしてい
るのかぼーっと動かずにいた。そして十分にも満たない時間で有馬は席を立ち上がり、
独り言を呟く。

「鬼の面を付けた隻眼の喰種……。期待出来ればいいが……」

そして、時刻は比企谷八幡が有馬貴将と対峙する場面まで戻る。

「こりや、本気出さねーと死ぬんじやねえか俺……。あんま制御できねーからこれだけ
はなるべくやりたくなかったんだけどな……」

全身を赫子で覆い、肩部からは悪魔の翼のような羽赫を出し、腰部からは計六本の鱗

赫を発現させる。

付いているマスクにも赫子がまとわりついていき、見る人が見ればその姿はさながら
：

「隻眼の悪魔……。通称デビルと言ったところか」

「デビル、ねえ……。まア……。あながち間違いないやねえだろうな」

完全な赫者となり、有馬と向き合う。

赫者となった影響か、頭の中には「体を返せ」「それは私のだ」「ほら、人間なんか殺しちやえよ」等、数多くの声が頭の中で響く。

うるせえ、黙ってろ。これは俺の身体だ、テメエらは黙って俺の血肉となつてりやい
いんだと頭に響く声を無理矢理抑えつける。

その比企谷の姿を見て、有馬も両手に持ったアタツシユケースを起動させてクインケ
を出すと、その両手には真っ黒のランスと少し形の変わったレイピアのようなクインケ
があった。

「行くぞ……。死神……」

「……………」

比企谷が一步踏み出して羽赫で射撃をしながらも鱗赫で有馬の身体を狙って突き刺しに行く。

有馬は比企谷の攻撃を必要最小限の動きで避けながらも両手のクインケを操って迫ってくる触手を的確に切り落としていく。

有馬のクインケ操術を見て比企谷は、間合いに近づけばやられるのは自分の方だと一瞬で理解する。触手全てを切断されて、比企谷は距離を保ったまま有馬を睨み付けた。

「…………もう終わりか…………？」

「バケモノかよ…………。腹くくれ、俺…………!!」

涼しい顔をしてこちらを見る有馬に向かって体勢を低くさせながら走り出す。

その間に鱗赫を再生させながらも羽赫をブレード状に変形。そのまま羽赫で斬りかかると、有馬はそれを身体を倒すように避けながらも黒いランスで一閃。有馬が振ったクインケの先にある比企谷の腹に一本の線が入ると血が吹き出した。

それを受けて、間合いに近づくのはやはり危険だと判断。ジャンプで後方に飛び下が

りながら鱗赫で手数押し of 攻撃を行う。

有馬は触手の連打を黒いランスで弾いていると、比企谷が黒いランスを捉えて有馬の手から弾いて後方に飛ばした。

レイピア状のクインケしか握っていない有馬は前方に突進するように走りながらも比企谷の鱗赫の攻撃を避けて、一言呟く。

「IXA……、遠隔起動……」

比企谷が着地する瞬間を狙ってIXAと呼ばれる黒いランスのクインケを遠隔起動させると、比企谷が着地した瞬間に、螺旋状に変形した黒いクインケが比企谷を頭上から腕を捉えて切断。

「いっはアッ……」

腕を斬られた箇所から目を直ぐに離して前方を見ると、既に有馬が目の前に迫っている。「不味いー」と思いながら身体を後ろに逸らすもそのままレイピアで腹を貫かれて血を吐き出した。

「間合い、だ……、つのヤロオ！」

自分の懐にいるのを逃がさないとばかりに自身の身体を貫いている有馬の頭上から
囲むように鱗赫で叩き潰そうとすれば、有馬は突き刺していたクインケを抜いてバック
ステップで離れながら身体を若干後方に傾ける。有馬の身体があつた場所を見ればそ
こを触手を通つていて間一髪で攻撃を躲している。

その隙に比企谷は遠距離で羽赫から雷のようなモノを形成して有馬を撃ちに行くも、
それは黒いランスが盾状に変形して受け止められてしまう。

攻撃されて血だらけの比企谷と無傷で涼しい顔をしながらこちらを眼鏡のレンズ越
しに見据える有馬。力の差は歴然としていた。

「一発も当たらねえのかよ……」

意識を失いそうになり、頭の中には自分が今まで捕食してきた喰種達の声が大きくなつていく。

「ヤメロオオオオ！　ごればオレノガラダアアア!!」

頭を抑えて叫び体内の声を黙らせる。その様子を見て、死神は呟く。

「……まだ。制御出来ていないのか……」

比企谷が有馬を見ると、その目はまるで「期待外れだ」と言っているように見えた。

「っ……その目で……俺を、見るな……。クソツタレ……」

一言呟けば遠隔起動で螺旋状に変形しての攻撃と盾状に変形で相手の攻撃を防げる近距離戦も防御も出来る黒いランス、そして未だその力を見せていないレイピアのクインケ。

両手のクインケの能力を相手から引き出せていないことから、有馬は未だ本気じゃない。

「256……」

「……は？」

「お前に致命傷を与える事が出来た場面の数だ……。お前は、まだ……。弱い」
「手加減されてんのかよ……」

それを聞いて比企谷は思う。あの一瞬でどこにそんな隙があっただろうと。俺ではコイツには勝てないと。そんな喰種よりも身体能力が化け物であろうコイツを相手にして勝てる喰種なんていないんじゃないかと比企谷は絶望をした。

6 戦う理由

体内で今まで喰らってきた喰種達の声がある。身体をよこせ、何故私を殺した、何故目の前の人間を殺さないか。

俺の目の前にいるのは、どんな攻撃をしようと傷一つすら付けられない死神。俺の様子を伺っているのか、目の前にいる死神は動かない。動こうとしない。

このまま戦えば俺は、間違いなく駆逐されてしまう。それだけは嫌だ。だからといって目の前の人間を殺すのも嫌だ。喰らうのも嫌だ。そんなことをしてしまえば、俺はもう、母が生涯愛した人間を愛せなくなる気がした。そんなことをしてしまえば、俺の愛している彼女の前に立てなくなる気がした。

けど、もういいのかもしれない。精一杯戦った結果がこの力の差。今死ねれば、俺の愛した人達には手が及ばないだろう。だから俺はここで死ぬべきなんだと。そんな諦めた想い。

『本当にいいのか』

走馬灯が駆け巡る中で声がした。

誰だか知らないがもういいんだ。生きるのに疲れてしまった。身体は血だらけでこんな死に際になって、何故こんなに必死になってもがいているのかも分からなくなってしまう。

『お前の帰りを待つ者がいるのに、お前は本当にここで死んでしまうのか』

もういいじゃないか。この死神を相手にどうしろと。

『お前が死神に勝てない理由。それは、喰種のくせに人間であろうとしてるからじゃないのか』

うるさい。黙れ。黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！

『そうやって死んで逃げるのか。愛する人間を残して』

ああそうだ。俺を愛してくれるあいつを残して俺は先に逝く。死神を相手にここまです生きようと頑張ったんだ。あいつも許してくれる。

『本当にそう思っているのなら愚か者だな、お前は』

じゃあどうしろって言うんだよ！俺は精一杯戦ったんだ！まだ制御しきれない赫者になって、相手の間合いを把握して攻撃をした。それでも、目の前のあいつはそれをごごとく振じ伏せた。出来る事は全部やった。

『いいや、お前はまだ何もかもを出し切れちゃいない』

……何を根拠にそんなことが言える。お前に俺の何が分かるってんだ！！

『分かるさ。何故なら、俺は。お前だからだ』

何を言ってるんだ。俺はここにいる。巫山戯るのも大概にしろ。

『巫山戯てなんかないさ。お前が人間としての比企谷八幡ならば、俺は喰種としての比企谷八幡だからだ』

何を言ってる。俺は俺だ。お前なんか知らない。

『お前が見て見ぬふりをして逃げ続けたからだろう。俺はずっとここにいたぞ』

そうかもしれない。人間と喰種の間生まれ、半喰種として誕生してから俺は人間として今までを過ごしてきた。何故なら俺の大好きだった母親が、人間を愛していたから。そんな姿を見ているうちに、それが当たり前なんだと思うようになった。喰種なんていないんだと幼い頃の俺は見えて見ぬふりをした。

半喰種は二種類存在する。喰種の臓器を埋め込まれて人間から半喰種になった人工型と、人間と喰種で種を交わして生まれた天然型。

天然型の半喰種は人工型の半喰種や純粋な喰種と違って何故か人間の食べ物を摂取しても吐き気を催さない。それが余計に俺は人間なんだと思ひ込んで逃げ続けた理由なのかもしれない。

しかし、高校卒業を間近に控えた二月。用事があって東京にいた俺は、俺と同じ天然

型の半喰種のエトと出会った。今思えば、そこから俺は喰種としての自分を少しだけ受け入れたのかもしれない。だからこそ総武の奴らを巻き込むまいと行方を眩ませた。しかしそれでも足りない。目の前の死神を超えるには。

『俺を受け入れろ。そうすれば、お前の中に蔓延る喰種共は俺が黙らせてやる』

お前を受け入れれば、俺は赫者を制御できて有馬貴将に勝てるのか。

『それは分からない。奴の実力は未だ底が見えていない。だが、お前が俺を受け入れれば、もしかしたら一矢報いることは出来るかもしれないぞ』

だが、お前を受け入れてしまったら。俺は、もう人を愛せなくなってしまうんじゃないか。それだけが心の中で不安が広がっている。

『俺を受け入れたからってお前は変わるのか？ 違うだろう。お前はお前だ。いつかお前がカネキを拾ってあんていくに連れていった時。芳村さんがカネキに言っていた言葉をお前も聞いただろう。人の世界を知り、喰種の世界を知っている君は、両方の世界

に居場所が持てる存在なんだと。それはお前も一緒じゃないのか』

ああ、そんなことも言っていたかもしれない。

『お前は何故戦っている？ 戦う理由はなんだ。思い出せ』

俺の戦う理由……。それは……。守るためだ。俺を愛してくれる人を。俺を仲間と言ってくれる喰種を。

『誰も失いたくないのなら、醜くても足掻け。最後まで。愛する人を守るために。その結果、相手が致命傷を負ってしまったなら、それは相手の落ち度だ。こちらは守るために戦っているのだから。避けられなかった相手が悪い、それだけだろうか？』

そうだ。俺は守りたい。アイツらを。雪ノ下を！

『さあ、反撃の時だ。目の前に立っている死神に目にもものを見せてやれ』

俺は……こんな所じゃ終われない。終わってたまるか!!

自分の世界から開放されて顔を上げれば、白い死神がその冷めた瞳で俺を見ていた。喰種としての自分を受け入れたからか、頭の中はすつきりしていて、今まで喰らってきた喰種達の声も聴こえなくなっていた。

「……目は覚めたか」

「……ああ。俺はもう迷わない。俺の帰りを待ってくれるヤツらの為に。こんな所じゃ死ねない!」

「……良い目だ。ようやく……少しは本気を出せそうだな」

そう言つて目の前の死神は両手で持つ二本のクインケを構える。

それに応じるように俺も腰部から出ている鱗赫を伸ばすと、まるで羽赫とは別に細い翼が六枚生えているかのように見える程に形が変わっていた。喰種の自分を受け入れたからだろうか。

「こつからは……本気で行かせてもらおうぞ、死神」

「……ハッ」

グツと力を貯めてから、それを一気に解放して有馬貴将に詰め寄る。

「……速いな」

そう呟いた奴は黒いランスで下からすくい上げるようにそれを振ってきた。その攻撃を細い翼のようにも見える鱗赫で防ぐと、二本ほど斬り飛ばされる。

前の俺ならそこで二撃目を恐れて引いたはずだが、今は違う。

そんな攻撃を今更気にしないかのように踏み込んでから有馬貴将の顎にいつの間にか傷が治っていた右腕を使って鋭い針を刺すようにアツパーを仕掛けると、有馬が白い方のレイピアで俺の肘から下の腕をぶった斬った。しかしそれも計算通り。

右腕が斬られ、肉と骨が剥き出しの腕でそのまま有馬貴将を叩きにいくと、頭を後ろに仰け反らして躲される。

これが駄目なら次の手だと言わんばかりに、躲した頭に向かって羽赫で左から斬りつけにいくとそれは黒いランスで俺の胴体を叩いて後ろに吹き飛ばされた。

吹き飛ばされながらも空中で体勢を整えながら、先程斬られた鱗赫を再生させてから

壁に突き刺してそのまま垂直に立った。

「……中々いい動きになったな。デビル……」

「ちつ、こんな仕掛けても掠りもしないお前に言われたくないな」

未だ涼しい顔でこちらを見据えるそいつに、今度はどう仕掛けてやろうか考えていると、有馬貴将は白いレイピアをこちらに向けた。何をするつもりだ？

「ナルカミ」

奴がそう呟くと、白いレイピアが開いてバズーカのように砲身を露わにして電撃をこちらに飛ばしてくる。

まだそんな攻撃が残ってんのかと驚きながらも羽赫を使って空中に逃げて腰から伸びた触手を有馬に目掛けて放つ。

鱗赫の連打を避けながらも有馬は黒いランスで叩いてそれを弾きながらナルカミと呼んだクインケでこちらに遠距離攻撃を仕掛けてくる。

鱗赫の攻撃を止めてから空中で漂うのをやめるように地面に降り立って雷撃を躲す。

こちらにも負けじと羽赫で電撃を飛ばすとそれを読まれていたかのように避けながらも、どうしても躲せないものだけ黒いランスを盾に形状変化させることで対処される。

「今だ！」

盾になって視界が塞がれた一瞬を付いて全速力で有馬貴将に詰め寄るも、俺のスピードに鱗赫が着いてこれないようで、仕方なく左こぶしで盾になったそれを殴りつける
と、有馬は後ろによるめきながらバク転して着地をした。

「……………今のはいい攻撃だったな」

「そりやどうも。俺の身体に鱗赫が付いてこれたら赫子で攻撃したんだけどな。流石に殴った方が早かったわ。……………上手く体勢立て直されちゃったけど」

黒いランスのクインケが傷ついた様子はない。やはり赫子じやなきやへし折ることは無理らしい。

そうしてまたお互いに睨み合うも、有馬は突然クインケをアタツシユケースに戻した。

「……何故クインケを仕舞った？」

仕舞う理由が分からず有馬貴將に問い詰める。

「言っただろう。お前に会いに来たと。お前の実力は知れた。これ以上の戦闘は…：必要ない」

「無敗の捜査官のお前が、俺を見逃す理由にはならないんじゃないか？」

「………詳しいことはエトに聞け」

「………なんでお前の口からエトの名前が出てくるんだよ」

「………さあな。隻眼の悪魔…：デビル。…：期待している」

最後に意味深な言葉を残して有馬貴將は部隊を連れて去っていった。その言葉の意味が分からず、俺は斬られた腕をくつつけようとしながらも戦闘していたその場で立ち尽くしていた。

7
行方

「クソっ……腕がくっつかねえ……」

有馬貴將に斬り落とされた右腕を再生させようとしてもその兆しが訪れない。皮だけが無駄にくっついて肉と骨は繋がらず治癒力が行き届いていない。まさにぶら下がっているだけに等しい右腕だった。

傷が出来ていればそこから血は流れ出ていくし、それは戦闘中でも関係ない。そして血が足りなくなれば瀕死にもなるし再生だって出来やしない。だからこそ治癒力が発揮できていないのだ。

有馬貴將との戦闘を振り返ってみれば、俺ばかりが攻撃を貰って有馬貴將には傷一つすら付けられなかった。思い返す必要もないほどの完敗。それなのに有馬貴將はあれで本気ではなく、俺が死なない程度に手加減をしているというのだから本当に人間なのか疑いたくなってくる。

「血を流しすぎたのか……。肉……。誰でもいい……」

肉を食って回復しなければと思っても身体は言うことを聞かず、その場でへたれこむ。立ち上がる気力すらない程に。

対峙している時は奴に一矢酬いる為に気力で立っていて、その有馬貴将が立ち去って安堵した途端に全身に力が入らなくなった。そこまでの死闘には見えないかもしれないが、有馬貴将と向き合うと喰種達は自分の死を覚悟する。それ程に有馬貴将の圧力は凄みがある。

建物の壁に寄りかかり、貫かれた腹も治そうと試みるがそれもダメで未だに俺の身体からは血が流れ続けている。

「こん……な……と……ところ……死ねるか……」

血を流しすぎたのと、慣れない赫者によって全身の力は入らずその場で倒れ込む。

既に赫子は消滅していて、悪魔のマスクの右目から赤黒い目が見えているだけの死に損ないにしか見えない喰種。

残った左腕と力の入らない両足で路地をまるで芋虫のように這いずり回る。

今の身体の調子だと後一回くらいなら赫子で攻撃は出来るだろうという力しか残さ

れていない。

肉が食いたいという欲求で支配されているが、路地から出ることは出来ない。もしこんな状態で路地から出てしまえば、人々は喰種の死に損ないがいると大騒ぎしてあつという間に白鳩の手によって駆逐されてしまうだけ。それだけは避けなければならない。とはいっても、喰種の狩場である路地なんかにはわざわざ入ってくる人間もない。

「俺……い、ま……なに、を………」

人殺しはしないと決めているのに頭の中は人間でもいいから食わせろと叫び続ける。嫌だ、人間は食いたくない！人殺しは嫌だ。

「い、やだ……嫌だ嫌だ嫌だ嫌だアアアアア!!」

嫌だと叫んでも更に血を流しすぎて力は出なくて、さつきまでは出せたかもしれない。赫子も血の流しすぎでもう出てこない。本当に死ぬ一方手前だった。

意識も朦朧としてきた中で、路地で誰かが歩いてくる靴の音が鳴り響く。

その足音はこちらに近寄ってきていて、やがて目の前まで来ると音が止まる。

「なーんか死に損ないが倒れてるけど……見覚えがあるんだよねえ……」

若い女性の声の上から聞こえた気がした。身体はもう言うことを聞いてくれず顔を上げることもできない。

もう誰でもいい、助けて欲しい。

「た、す……け……」

「……ふーん、誰かと思ったら……今日は非番なんだけど……まあいいか」

身体を持ち上げられた気がしたが顔を確認することも出来ない。それぐらいに俺は弱り果てていた。

誰だか知らないが助けてくれた事に感謝を述べたいのに、口も開かず声ももう出ない。どうなるかは分からないが、もし生きていたら、その時は起きた時に考えるところ。今は……寝てもいいだろう。

そうして安心すると、俺は意識を手放した。

「クソモヤシ……アンタ、比企谷さん最近見てないの？」

「うん……、大学にも来てないみたい……。どうしたんだろう……」

リョーコさんの一件から数日が経った。リョーコさんもすっかり回復して今はあんでいくで匿われて生活している。

この間、リョーコさん達が回復したら比企谷先輩が連れていくという約束だったんだけれど、肝心の比企谷先輩がここ数日の間あんでいくに訪れることは無かった。

「比企谷さんに限って、白鳩に狩られた心配はないと思うけど……」

「もしかして……この間言ってた特等捜査官？にやられちゃったのかな……」

「バカな事言っつてんじゃねエよ！ 比企谷さんがやられるもんか！」

ボクが思ったことを呟くと、トーカちゃんは顔を歪めて怒鳴る。その怒鳴られた拍子にボクの体が少しだけ震えた。こんなトーカちゃんは初めて見る顔で、それだけ尊敬していたのが伺える。

「比企谷くんなら心配いらないだろう」

「店长……でも！」

「今、四方くんもあんでいくの手伝いをしながらも探してくれている。私たちに出来ることは、無事であることを祈るだけだ」

お客さんに出す珈琲を淹れながら店长はトーカちゃんを宥める。

ボクもボクで、大学に通う度に比企谷先輩が来ていないか確認はしている。けど、いつも見つからない。ヒデにも聞いているが、ココ最近は見かけていないとのこと。本当なら比企谷先輩の知り合いに聞くのが早いんだろうけど、あの人が大学で誰かという所を見た事がないので手詰まりだった。

比企谷先輩の知り合い……そうだ、これだ！

「あの、店长……」

「どうかしたかな、カネキくん」

「比企谷先輩の高校の頃のお知り合いって……この店に来たことないんですか？」

「比企谷くんの知り合い……。一度だけ、あるかもしれない」

「ホントですか!？」

「あれは、比企谷くんがまだ私たちと親しくなる前の時だから……比企谷くんが大学に入ったばかりの頃じゃなかったかな。同じ歳くらいの女性とこの店に来ていたよ」

ピンゴ!もしその人を探せるならもしかしたら比企谷先輩が今何処にいるのかが分かるかもしれない。

「店长、その人ってどんな感じの人でしたか?」

「そうだね……肩ぐらいいまで伸ばした茶髪で、少しウェーブした髪型だったかな。カネキくん、その人を探すつもりかな?」

「はい、もしかしたら比企谷先輩の居場所の手がかりになるんじゃないかって思ってます……」

「それなら……千葉県の海浜総合高校の辺りに行くといい」

「千葉県……?」

「ちよつとだけ聞こえた会話の中に、海浜総合高校を卒業して……というのが聞こえてきたから、もしかするかもしれないよ」

千葉県……思いがけず比企谷先輩の地元を知ってしまったかもしれない。けどこれは大きな一歩なのは確かだろうし、万が一が有り得るかもしれない。

「早速、次の土曜日に行ってみます」

「モヤシ、アタシも行く。あんただけじゃ比企谷さん探すの時間かかるでしょ」

「トーカちゃん……」

それだけトーカちゃんも心配をしているのだろう。それに、トーカちゃんの言うことも一理ある。ボクだけで探していたら何日かかるか分からない。

「うん、一緒に行こう。海浜総合高校……最寄り駅は……海浜幕張？」

「それじゃ、土曜日に海浜幕張駅前に10時。遅れたらぶつ殺す」

……やっぱりトーカちゃん怖い。

8 出会い

アタシが比企谷さんと初めて会ったのは、あの人があんでいくに客として来た時だった。

ボサボサに伸びっぱなしの髪に頂点は重力に逆らって立っているアホ毛。身長も至って平均的。目はこの世界の汚い所を見つけていたのではないかと例えてもおかしくない腐り具合で、喰種によく間違えられそうな目付き。パーカーで隠れていてよく見えないけど、人並み程度には鍛えられてそうな体格と言えなくもない。見ようによつてはヒョロいと表現できなくもないかもだけど。匂いも普通の人間と変わらない。

店長曰く、この間彼女かは分からないが茶髪の女性と一緒に来店していたらしい。アタシは初めて見た客だったから、その時は出勤日じゃなかったんだろう。

本当に普通の人間。それがアタシから見た、比企谷さんの第一印象だった。

アタシは喰種で、人間にバレないように生活を送らなければいけないのに、なんでこんな奴が普通に生活できるんだって世界を恨んだ程だ。

そんな恨み籠った目で見たい気持ちを抑えて注文を取りに行くと、あんでいくブレンドの珈琲だけを注文してきた。

注文を受けて珈琲をカップに注いで持つていくと、彼のドロドロとした目は真つ直ぐにこちらを見ていた。まるで観察されているようでとても気持ち悪かった。

アタシの事を見る客はよくいるし慣れたもの。アタシはそう思つてなかつたけど、あんでいくの看板娘として皆にも親しまれていたから。しかし、こんな観察するように見られたのは初めてで、人間のくせに生意気な目で見るなど思わず身体が震えそうになつたのをよく覚えている。

何を考えているかよく分からない目付きそのままに、彼は恐る恐る話しかけてきた。それがアタシと比企谷さんの交わす初めての会話だった。

「あの……ここにいる人たちつてももしかしなくても皆喰種だったりします?」

本当にビックリした。いくら他のお客さんに聞こえなかつたらうと、小さな声でそう問いかけてきた彼を思わず睨む。

それが分かつてどうして人間がこの店に来たのか不思議に思う。

だからこそ、アタシも言い放つ。

「……それが分かつてなんでこの店に来たの。アンタ人間でしょ?」

答え次第では殺すと己の心に決めてまた睨む。お客さんにこんなことしちやいけないけど、生きて返してはいけない。そんな直感がアタシに下されていた。

幸いにも店内に人間のお客さんは目の前の男しかおらず、他は皆喰種だったからつい頭に血が上ってしまった。反省しなければと自分を戒めて冷静になる。

問い掛けられてから改めてその目を見ると、今までにも色々な物事の本質を見抜いてきたのではというその冷たい眼差しに思わず吸い込まれそうだった。

「この間初めて連れとこの店に来た時、珈琲美味しかったし……」

「いくら美味しかろうと、ここにいる人達が喰種だって分かったら人間じゃ普通は近寄らないでしょ」

「普通はそうだろうな……まア……俺が普通じゃないってことで納得してくれ」

本当になんなんだと呆れる程に危機感が薄い人間を尻目においてアタシは業務に戻る。その日、その男と会話を交わすことはこれ以後無かった。

それからその男は度々店に来ては珈琲だけ飲んで帰っていく。その度に注文を取るのにはアタシだった。

そんな日々が続いたある日。外は沈みゆく赤い夕陽に照らされ、そろそろ夜の帳に街が包まれて喰種が活発になり始める時間に、店の扉についた鈴が鳴る。

「いらつしやいませー……つて、またアンタか」

「客に向かつて第一声がそれはどうなんだよ……。店員として……」

そろそろアタシも上がりの時間に差し掛かった頃に来店してきた客を挨拶で迎える
と、またこの男かと分かつて思わず愚痴に似た言葉が零れる。アタシの態度を見て、男
は溜め息をつきながらアタシの態度に苦言を呈した。

懲りずによく来るものだと思いつつも席に案内してカウンターに戻って、お客さん
が使ったお皿やカップを洗う。その作業を行いながら先程来た男を見ると、メニュー表
を見ながら唸っている。唸った所で、コイツは珈琲しか飲まないのに何をそんなに悩ん
でいるのか。

洗い物が一段落した所で声がかかったのでメニューを取りに行く。

「……注文は？」

「俺に対しての態度……もういいけど……」

慣れたものと言わんばかりのそれについてイラついてアタシもムキになった。

「さっさとして。アタシはアンタと一緒に居たくないの」

「そりや見れば分かるけど……エスプレッソで」

「かしこまりました、少々お待ちください」

ムキになってしまふ所がまだまだ子供だと自分で分かっているつもりでもつい態度に出してしまうのはアタシの悪い癖。それを中々治せないのだから余計にタチが悪い。

注文されたものをカップに注いで席に持つてくと、男はまたアタシに話しかけてくる。

「そーいや……知り合ってるのにお前の名前知らないんだけど」

「名札ついてんだから見ろよ」

「いや、霧嶋ってのは分かる。下の名前は？」

「知ってどうすんの？」

「どうもしない。ただの自己満足だが……」

「なら教えない。教える義理もないし」

「嫌われたもんだな……ほんと」

ヤレヤレとまた溜め息を吐くその態度を見て、余計に教えてやるもんかと心に決めた。

ふと気になって時計を見れば、アタシはもう上がる時間になっていた。

「じゃあアタシ上がりだから……後はあの男の人に注文して」

「はいはい、お疲れさん」

帰宅するためにすっかり暗くなった道を歩く。アタシが歩いてる道に転々と存在する店は既に店じまいの準備に取り掛かっている。

あの男と邂逅してからというもの、あんでいくに出勤する度にあの男の顔を思い出して心がざわつく。恋とかそういう類では決してなくて、ただムカつくというだけ。

あの全てを見透かすようなドロドロとした目で見られると、まるで自分の心が素っ裸に剥かれたみたい嫌な気持ちになる。これもただの思い込みかもしれないけれど、そんな気持ちにさせられてしまう。

「……………あア—！もう！なんでアイツのことなんか……………」

考えてるだけでイライラして頭を掻き毟る。

何処にもぶつけようのない苛ついた頭で考えてみると、あの男が本当に普通の人間なのか怪しく思えた。

あんでいくに來てもいつも頼むのは珈琲だけ。前に連れと來たとは言っていたが、それ以來誰かと來た所を一度も見たことはなくていつも一人。そうやって考えていると本当はあいつも喰種なんじゃないかって思えてきて仕方ない。

「……………なんて、考えすぎか」

馬鹿馬鹿しいと捨て置いて、月に照らされた夜の帳の中を歩いて帰宅する。

鞆を机に置いてベッドにダイブ。枕に顔を埋めていると、疲れが溜まっていたのか眠気が襲ってきた。

制服のままで寝ると皺が寄ってしまう。それは避けた方がいいだろうとベッドから立ち上がると家のベルが鳴った。

こんな時間になんだよと扉を開けると、そこにはあの忌々しい男が立っていた。

「はア……アンタ……本当にストーカーかよ……」

「待て待て、俺はただ……」

「問答無用。ぶつ殺す」

何故アタシの家を知っているとかそういうのを考える余裕も最早なく、赫眼を発現させて肩部から赫子を露出して棘を発射させた。

これで死んだだろう。最近はまだ食事してなかったし今日はこいつでいいかと前を見れば、触手みたいなものがアタシが発射させたであろう棘を防いでいた。

「あつぶねエ……。いきなり何すんだよ」

「アンタ……喰種だったの」

「俺……以前お前に人間か訊かれた時に肯定してないはずだけど……」

すっかり眠気で苛ついた頭で必死に思い返してみれば、確かに肯定はしていなかったかもしれない。ただ、自分は普通ではないと。

それに。

「アンタの目……なんで片方だけ……」

相手の赫子が視界から退くと、そこには右目だけ赤黒く染まった目でこちらを見る男がいた。

なんで片方だけなのか気になって不思議に思うと。

「ああー……俺がハーフだから、と言えば信じてもらえたりする？」

ハーフ。何処の国との？と思ったりしたが、この場合はそうでは無い。恐らく、人間と喰種のハーフ。

「そんなこと有り得んの？」

「じゃなかったら俺の存在はなんだって話だろ。つか、お前歳下だったのな。ほれ」

そう言って男が渡してきたのは私の学生証。どうしてコイツがと思えば、アタシが口

に出すまでもなく、答え始めた。

「いや……あの後帰ろうと店を出たらこれが階段のところに落ちてたし、届けてやろうかと」

それを聞いて、どんだけ律儀なんだコイツと思ってしまった。店の階段に落ちていたのなら、あんていくの店員に渡すだけで良かっただろうに。

そんなことよりも、聞き捨てならない事を耳にした気がした。

「……アンタ、今なんて？」

「あ？ いや、お前俺より歳下なんだなと」

それはつまり、アタシより歳上であるということ。幾つなのか気になって思わず訊く。

「……いくつ？」

「……今年で19になるか。上井大学の一年。そういうお前は、清巳高校の普通科一年

……つまり俺の三個下だな」

「……こんだけ歳離れてたら普通気づかない？」

「生憎とお前が働いてる時の制服しか見てないからな。高校の制服見てりや分かつただろうよ」

「アタシが店を出てく時に気づかない？」

「あの時は本読んでたし見てねえな」

コイツもコイツだが、アタシもアタシつてところか。お互いに気づかないなんてどれだけ阿呆だったんだろうと。お互いに十代なら歳が三つも違えば普通は分かるというのに。それだけお互いがお互いに興味なかった証拠なのかもしれないが。

「……ありがとう、ごさいます」

「ま、終わったことだ、気にすんな」

相手が歳上だと知って、言葉遣いも丁寧なものにする。目上の相手と会話する時の基本。
本。

そうやって会話を交わしていくうちに頭もすっかり落ち着いていて、赫眼と赫子を

引つ込めれば、相手も赫子を引つ込めて右目の赤黒い目を普通の白い目に戻した。

「あ、あの……名前は何？」

「俺？　そーいや言つてなかつたか？……比企谷八幡だ」

お互いに知り合つてから暫く経つが、名前を知らなかつたことに気づく。相手はアタシの名前をあんていくの制服に書いてあるネームプレートで苗字だけ知つていたが、学証を拾つたということだからもう下の名前まで知られてしまつているだろう。

それから。彼があんていくに来る度に会話を交わしていくうちに他の皆も比企谷さんと打ち解けて、今ではすっかりあんていくの常連の喰種になつてゐる。

一度だけ実力が知りたくて、あんていくの地下で軽く撃ち合つてみれば結果はアタシの惨敗。軽く捻られたという表現が正しいかもしれない。

なんでそんなに強いのか問いかければ比企谷さんは

「守りたい人がいるから、つて言えばいいのか……。俺の母親は人間が好きだつた。その生き方を見て、俺の母親はとも強い人なんだつて。だから、俺も人間を愛して守りたい存在が出来れば強くなれるんじゃないかと信じて、今がある。まあ……あんていく

で過ごしてりやお前もそのうち分かるようになるさ」

それを聞いて以来、アタシは比企谷さんが実はとても凄い人なんだと尊敬するようになった。人間性でも、喰種としても。

アタシがカツとなって相手に噛み付こうとする度に止めてくれたり、街中で会えば、嫌だと言いつつも買い物に付き合ってくれたりとお節介を焼いてくれる。

第一印象の時とは違って、今では捻くれ者だけとお節介焼きの優しい人という印象に変わっていた。

これが、アタシと比企谷さんの出会いの始まり。

そんな比企谷さんが行方不明だと知って、今こそ今までの恩を返せると思っつついクソモヤシに一緒に行くと言ってしまった。

「トーカーちゃん、遅いよ……」

「うっさい。ちゃんと来たでしようが。さっさと比企谷さん探しに行くよ。確か……海浜総合高校だっけ？」

「う、うん。調べてきたから僕が案内するよ」

「よろしく」

少しでも居場所の手掛かりが見つかればいいなと思いつつ、ナヨナヨしたコイツの後ろを歩いて駅を後にした。

9 邂逅

僕の後ろをトーカちゃんが着いてくるように歩いている。

携帯で海浜総合高校の場所は確認したし、学校の住所をマップに入れてルートは出ているから迷うことは無いはず。千葉県に来たことが全くないというわけではないけれど、住宅街を歩いたとかそういう訳ではなくて、デイスティニールランドに行ったから来たことがあるぐらい。それ以外で千葉県に訪れたことは無い。

そう考えると比企谷先輩の地元であるこの辺りを歩くのはとても新鮮で、不思議とワクワクした気持ちが込み上げてくる。

「アンタ……なんかソワソワしてる？」

「そう見えた？ それなら、この辺に来るのが初めてだからワクワクしてるからかな」
「ふーん……」

トーカちゃんが話しかけてきたかと思えばすぐに興味無さそうに返事をして再び黙る。そしてまた僕とトーカちゃんの間で静寂が訪れる。先程からずっとこの繰り返し。

暫く歩いていると学校の校舎らしきものが見えてきて、校門が見えた。建物は真新しくつい最近出来たというぐらいに綺麗で、一件大学に見えなくもない造りをしている。

「ここが海浜総合高校……」

「綺麗な学校。うちの学校とは大違い」

思わず言葉を洩らすと、後ろでトーカーちゃんも校舎を見てその綺麗さに驚いているようだった。

「三つの学校が合併して出来た新設校らしいよ。ネットに書いてあつたし間違いないと思う」

「なんつーか……綺麗すぎて落ち着かない。大学みたい」

「とりあえずこの辺歩いてみようか。比企谷先輩の知り合いがもしかしたらいるかもしれないし」

「アンタに言われなくてもそれくらい分かるっつての」

僕がそう提案すると、トーカちゃんはさっさと店が立ち並ぶ方に歩いていってしまう。それを追いかけて僕も歩き出した。

それからまたしばらく歩いていくと、ららぽーとがあると分かってららぽーとの中に入っていくと、人がかなりの賑わいを見せていた。

「ねえ……この中から比企谷さん探すとか無理じゃないの？」

「なんか……僕もそう思えてきたよ……。ははは……」

ららぽーとの中はだいぶ広いらしくかなりの人がいるが、この中から比企谷先輩を探すのは困難と言える。トーカちゃんもそう思ったのか、困った様子で周囲を見渡していた。

「そのの貴方達、少しいいかしら」

若い女性の人に後ろから話しかけられたので振り返ってみれば、艶が良い長い黒髪に透き通る肌で周囲の視線を釘付けにするぐらい綺麗な人が立っていた。

その容姿に思わず見惚れていると、トーカちゃんが後ろから不満気に僕のふくらはぎ

をつま先で蹴りつける。痛みを我慢してトーカーちゃんを見れば、そんな女にデレデレしやがってみたいな目で私怒っていますという態度だった。そんな僕らのやり取りを見てた目の前の女性の人が苦笑いを浮かべながら口を開いた。

「さつき貴方達が口にしていた比企谷、という名前の人なんだけれど……」

「比企谷先輩ですか？」

「ええ。もしかして、その人の名前は比企谷八幡ではないかと思つてね」

比企谷先輩の名前が相手から出てきてトーカーちゃんと一緒に目を見開いてしまう。

どんな偶然だろうとなんでもいい。この人が比企谷先輩のことを知っているのなら、今は少しでも比企谷先輩に繋がる情報が欲しい。

そう思つて僕が話しかけようとする、トーカーちゃんが間髪入れずに割り込んで関係性を問ひ質していた。

「彼との関係性ね。彼と私は恋人関係を築かせて貰っているわ」

「比企谷さんの彼女……？」

「ええ。申し遅れたけれど、私の名前は雪ノ下雪乃。彼の同級生であり、彼と高校時代か

ら仲良くさせてもらってるわ」

雪ノ下雪乃さんと比企谷先輩の関係性を聞いてとても驚く。

比企谷先輩は自分のことを全然話さない人で、大学やあんでいくでし合わないから恋人がいるとは聞いたことがなかった。

「最も、高校を卒業してから彼とは一度も会っていないけれど」

「一度も……?」

「なんなら今通っている大学さえも知らないわ。彼、何処に通うかも教えてくれなかったから」

トーカーちゃんと僕だけはその理由が分かかってしまう。何故なら、比企谷先輩が喰種だと知っているから。半喰種も立派な喰種だから、比企谷先輩と恋人関係を築いている雪ノ下先輩は喰種対策法に引っかけかかってしまう。だからこそ誰よりも優しい比企谷先輩は恋人である雪ノ下先輩の前から姿を消したんだ。例え心配をかけることになろうとも恋人を巻き込みたくないから。

「ここで話すのも周囲の目が気になるし、何処かに移動しましょうか。貴方達、比企谷くんの後輩？」

「は、はい」

「それなら心配いらないわね。私の家に行きましょう」

そう言つて雪ノ下先輩は僕とトーカちゃんを連れてららぽーとから出て歩き出す。

いくら比企谷先輩の後輩だからつて初対面の相手を自分の家にあげるのは些か不用心ではないだろうか。僕とトーカちゃんがそうだが、この世界には喰種もいる。少し考えれば分かることのはずなのに雪ノ下先輩の決断に迷いはなかった。その決断だけで、この人がどれだけ比企谷先輩の事を信頼しているのかがこれだけで分かってしまう。

歩くこと数十分が経つた頃。僕とトーカちゃんは雪ノ下先輩の案内で雪ノ下先輩の自宅である高級マンションに来ていた。雪ノ下先輩は比企谷先輩と同級生という事なので、親がお金持ちなのだろう。でなければ一介の学生がこんな高級マンションに住めるわけもなし。

オートロックに番号を打ち込んでドアを開けてエレベーターに乗り込む。目的の階層に着いてから少し歩くと、雪ノ下先輩は角の部屋の前で止まって、持っていた鍵でロックを開けて僕らを入れた。

部屋の中はとても片付いていながらも、仄かに珈琲の匂いが部屋に立ち込めていた。

「雪ノ下先輩、珈琲飲むんですね」

「ええ、比企谷くんがよく珈琲を飲んでいたから。彼、あまり紅茶とか飲まなかったし必然的に私が出す飲み物も珈琲になっていて気付けば、って感じね。荷物を部屋に置いてくるからリビングで寛いでいて頂戴。すぐに行くわ」

そう促されたので僕とトーカちゃんはテーブルが置かれている傍のソファに座る。周囲を見渡してもあまり物は置かれていなくて、見た目や話し方から微かに感じるお嬢様という雰囲気そのままだった。

「なんか……落ち着かないね」

「そりゃあ初めて会った人の家なんだから当たり前でしょ。ていうかアンタ、もしかして女の部屋上がったことないの？」

「まあ……そういう縁もなかったしね……。あはは……」

僕が苦笑いを浮かべればトーカちゃんは溜め息をついてもっとシヤキツとしろと僕

に注意をする。

僕とトーカちゃんがそんなやり取りを繰り返してすぐにリビングの扉が音を立てて開いて雪ノ下先輩が入ってきた。

「お待ちせしてごめんなさい。すぐに飲み物淹れるわ。生憎と今日はお客さん用の紅茶を切らしているから珈琲でもいいかしら？」

「は、はい。大丈夫です。ね？ トーカちゃん」

「まあ……はい。珈琲でお願いします」

僕とトーカちゃんはお互いに紅茶を出されなかったことに内心安堵する。僕らは喰種だから紅茶を出されても美味しく飲めないから。

雪ノ下先輩がキッチンで珈琲を淹れてくれているので、部屋の中には先程より珈琲の良い香りが立ち籠める。

珈琲を淹れ終わると雪ノ下先輩はお盆に自分の分を含めた三人分の珈琲をテーブルに持ってきて置いたので、僕とトーカちゃんはカップを受け取ってから一口飲んだ。

口の中に入った珈琲はとても香り高く、その芳醇な味わいに思わず舌が唸る。

「さて、貴方達と私でそれぞれ比企谷くんについて聞きたい事があるでしょう。まずは、貴方達と比企谷くんの関係性について詳しく聞きましょうか」

「それなら僕が話します」

「その前に一つだけ……聞いてもいいかしら？」

「はい、なんですか？」

「貴方達、もしかしくなくても喰種だったりするかしら？」

雪ノ下先輩から言い渡されたその言葉に僕とトーチちゃんは目を見開いて驚く。

一瞬トーチちゃんが雪ノ下先輩に噛み付こうとしていたけど、僕がなんとか宥めるとトーチちゃんは相手が比企谷先輩の恋人であることを思い出して踏みとどまった。

僕とトーチちゃんの様子を見て雪ノ下先輩は安心したのか一息ついてから話し出す。

「先程からそわそわしていたからというのもあるけれど、私が珈琲でいいか聞いた時に安堵していたように見えたものだから……。もしかしてと思って聞いたけれど当たっていたよね」

「もし……今ので自分が襲われたらどうするつもりだったの」

雪ノ下先輩の言葉にトーカちゃんが若干苛ついた言葉を投げかけると、雪ノ下先輩はすぐに切り返してきた。

「そこは少し怖かったけれど、あまり心配していないわ。だって、貴方達は比企谷くんの後輩なのでしょう？ 彼がそんな教え方するとは思えないもの」

「それはつまり……雪ノ下先輩は比企谷先輩が……」

「ええ。彼は私に本当のことを話さなかったけれど、彼が喰種であることくらい知っているわ。でなければ、卒業と同時に姿を消したことの説明がつかないもの」

強い人だ。雪ノ下先輩に抱いた印象はそんな一言で表せるほどで、どれだけ比企谷先輩を信じているのかが分かる言葉だった。

高校を卒業してから一度も顔を見せに來ないと普通の人は捨てられたと思うだろう。でも雪ノ下先輩は比企谷先輩の事をずっとここで待っているんだ。いつかまた比企谷先輩がこの場所に帰ってくると信じて。

「とにかく、驚かせてしまったことについてはごめんなさい。以前、はつきりと言葉にしないで痛い思いをした事があったから……」

「いえ、いいんです。僕とトーカーちゃんも驚いてしまっただけですから」

「それなら良かったわ。それで、私に聞きたい事があるのではなくて？」

「はい。実は……」

そして僕はトーカーちゃんの代わりに雪ノ下先輩に話し出した。上井大学で僕と比企谷先輩は知り合ったことから始まり、僕とトーカーちゃんがあんていくで働いていて比企谷先輩はその常連客であること。そして……比企谷先輩が行方不明になってしまったこと。比企谷先輩があんていくに初めて来た時に茶髪の女性の人と来たことがあるらしいこと。その茶髪の女性という手がかりだけを頼りに比企谷先輩の高校時代の知り合いに会おうと探していたこと。その時にあったのが、雪ノ下先輩だったということ。

僕が話すことにトーカーちゃんが補足を交えながらも全てを話した。僕が話している間、雪ノ下先輩は黙って聞いていて口を開いたのは全てを話し終えてからだだった。

「そう……。彼、行方不明になっているのね……。全く……。本当に周囲の人を心配にさせるようなことばかり。高校時代からちっとも変わっていないわね」

「そうなんですか？」

「そうね。貴方達も分かると思うけれど、彼、捻くれ者だから。周りの人を巻き込まないようにいつも自分から遠ざかっていく。高校を卒業してからもそう。今もそう。そういう人なのよ、比企谷くんは」

高校時代の事を思い出しているのか、雪ノ下先輩の語りはとても懐かしそうに見えた。

「茶髪の女性に関しては特徴を聞いたから分かるわ。折本さんね。折本かおりさん」

「折本さん……？ 比企谷先輩とはどういったご関係なんですか？」

「比企谷くんと折本さんは中学時代のクラスメイトで、比企谷くんの初恋の相手と記憶しているわ。高校二年生の頃に再会したようなのだけれど、蟠りも解けて今では友人関係を築いている。それが比企谷くんと折本さんの関係。折本さんの性格上、多分比企谷くんとたまたま会ってあんでいくというお店に来たのだと思うわ」

比企谷先輩と折本さんの関係を話してから、それだけの推察を雪ノ下先輩は見せてくれた。

「その折本さんは今何をしてるかとかは……」

「そこまでは分からない。けれど、今回の一件と折本さんは無関係だと思わ。それだけは分かる」

「どうしてそこまで言いきれるんですか？」

トーカちゃんが折本さんについて訊くと、雪ノ下先輩は珈琲を飲みながら折本さんは無関係だと語り、トーカちゃんがそれに突つかかる。

「折本さんとは面識もほとんどないけれど……。そうね……。女の勘よ。霧嶋董香さんだったかしら？ 貴女もそう思うのではなくて？」

それを聞いてトーカちゃんも黙ってしまった。女の勘って怖いな。

それに、と雪ノ下先輩はまだ続きを話すようにまた話を続けた。

「彼、リスクリターンの計算に関しては凄い人だから、本当に何かあったんだと思うわ。比企谷くんは喰種なのだから例えば……。喰種捜査官に追い詰められて逃げられる隙がなく、重傷を負ってしまった……。とか」

「比企谷さんは並大抵の白鳩なんかには負けるような人じゃないですよ」

「それなら、相手がそれだけ強かったとかならどうかしら？　喰種としての彼を見たことがないから詳しい所までは分からないけれど、もし戦って重傷を負いながらも逃げ出せたとしましょうか。彼は傷を治そうとするとと思うのよ。それでも行方不明になるということは……誰かに比企谷くんを連れ去られたとか？　結構いい線いってると思うのだけれど」

比企谷先輩はあんでいくの珈琲が好きで毎日飲みに来るような人だ。そんな人がいきなりあんでいくに顔を出さなくなるのははつきり言っておかしい。

比企谷先輩がリョーコさんを助けた次の日の話。比企谷先輩は店長に特等捜査官が来るかもしれないから気をつけるように言われていた。その次の日から比企谷先輩は顔を見せなくなった。これを雪ノ下先輩の推察と繋げると、比企谷先輩があんでいくに訪れなくなった理由に説明がついてしまう。

それでも一つ気になることがあったので、僕は雪ノ下先輩に質問を投げかける。

「雪ノ下先輩はどうしてそんなに喰種に詳しいんですか？　雪ノ下先輩って喰種じゃないですよね？」

「それは……私の姉が喰種捜査官だからよ。私の姉が心配して喰種についてあれこれと私に教えてくれるものだから自然と……という感じね」

だからこんなに詳しいのかと納得した。けど、比企谷先輩がいなくなった理由はこれで分かった。不思議と納得出来るほどに辻褃が合っているからかもしれないけど、もしかしたら違うということも頭の片隅に入れておくことにした。

僕は比企谷先輩と雪ノ下先輩のお姉さんの関係も気になってそれについても問い質してみた。

「比企谷先輩と雪ノ下先輩のお姉さんの関係も聞いていいですか？」

「構わないわ。比企谷くんは姉さんのこと嫌いなようだけれど、姉さんはやけに比企谷くんを気に入っていたわね。比企谷くんがいなくなつてからは私にばかりちよつかいを出しているけれどね」

「なるほど……お姉さん、雪ノ下先輩のこと好きなんですわ」

「あの人に好かれても嬉しくないわ。こちらが疲れるだけだもの。自分も捜査官になつて忙しいはずなのに週末はいつも家に来てからかつて……それでも最近忙しいのか来てないのよね」

「来てない……?」

「ええ。多分忙しくなっただけだと思うのだけれど、連絡も寄越さなくなっちゃったのよ。全く何を考えているのやら……」

なんだかんだと言いながらも雪ノ下先輩もお姉さんの心配をしているあたりはちゃんと姉のことが好きなのだろう。

結構話し込んでしまっていたのか、気付けば三時前の時間。時計を見て雪ノ下先輩は何かを思い出したようで。

「随分と話し込んでしまったのね。ごめんなさい、この後予定があるから話はこの辺でいいかしら?」

「は、はい! お話ありがとうございます!」

トーカちゃんが珈琲を飲み干してから立ち上がると玄関に向かうので僕も急いで珈琲を流し込んでから荷物を持って玄関に向かう。雪ノ下先輩はそんな慌ただしくしている僕らを見送ろうと玄関まで付き添ってくれる。靴を履いたところでメモを一枚取り出してそれを僕とトーカちゃんに渡してきた。

「これ、私の連絡先だから……また何かあったら連絡して頂戴。力になれるかは分からないけれど……」

「いえ、ありがとうございます。お邪魔しました」

「ええ。帰り気をつけて」

雪ノ下先輩の家を出てマンションのホールまで着くと、トーカちゃんが凝り固まった身体を解すように身体を伸ばしていた。

「なんか……私あの人苦手」

「トーカちゃんとは確かにソリが合わないかもね」

駅に向かう最中で僕は一つ気になったことを思い出した。それは雪ノ下先輩に聞いたお姉さんが急に来なくなった話。捜査官だからたまたまと言われてしまえばそれまでだけど、忙しくても週末になれば必ず帰ってくるような人が突然連絡もなしに帰らなくなるのだろうか。

何か引つかかるのに解けないモヤモヤとした気持ちを抱えながら僕はトーカちゃん

の後ろを歩いて千葉を後にした。

10 監禁主の正体

さほど広くない公園で母親に見守られながら遊ぶ子供がいる。

子供はまだこの世の汚い所を見ていないからか、爛々と輝く瞳をしていて楽しそうに砂場で山を作っている。

やがて山を作るのに飽きたのか子供は砂場を離れて草むらに入り込んでトカゲを捕まえようとしたりバツタ等の虫を触ってみたりと戯れている。

「お母さん！ バツタ捕まえた！」

「ちゃんと草むらに帰してあげるのよ」

「分かってる！」

捕まえたバツタを草むらに置いてバイバイと別れの言葉をかけると、子供は公園の水場で手を洗ってから母親の元へ行く。

もういいの？と聞く母親に、もう十分と答えた子供は母親と手を繋いで公園を後にする。

「楽しかった？」

「楽しかった！」

「お父さんももうそろそろ帰ってくるから急いで帰りましょ」

母親と手を繋いでいる子供は大好きな母親と一緒にいれるのが嬉しいようで、常にニコニコしている。

子供が母親にあれは何と訊きながらも帰路につく。

「お母さん、あつちからいい匂いするよ？」

住宅街を歩いていると子供が美味しそうな匂いを嗅ぎつけたのか母親にそう言うと、母親は決まって否定する。

「そつちは危ないからダメよ。帰ったらご飯にするから、ね？」

「……うん！ お母さんのご飯美味しいから好き！」

「ふふ、ありがとうね」

匂いに釣られそうになった子供を宥めた母親は子供を撫で回す。撫でられた子供はきやーつと嬉しそうな声をあげながら母親に連れられて少し早い速度で歩きながらもその路地から離れる。

お腹が空いた子供は先程まで爛々と輝いていた瞳の右側が気づけば赤黒い目に変わっていて、それに気づいた母親が子供に眼帯を渡すと子供は右目に眼帯を付けていた。

見た目は普通の親子でありながらも子供の赤黒い目がこの親子は喰種なのだ教えてくれた。

「……夢か」

その先はどうなったのか気になるところで目が覚めて監禁されていた事を思い出す。幼い頃の母親との記憶。今でもたまに夢に出てきて、あの頃はまだ純粋だった自分を見て子供だなど笑う。

周りを見回すと、この部屋は随分使われてなかったのか所々に埃が積もっている。窓はなく、ジメツとした肌触りで地下の部屋特有の暗さもある。

次に自分の手足に繋がれた鎖を見る。普段なら容易に抜け出せるはずなのに鎖をちぎれるほどの力も入らず赫子も出せない。

傷はどうなったのか気になったが、右腕が完全に治っていたことから腹も治っていると推測できるし、適度な食事はさせてもらえてるみたいだが喰種特有の力が何故出せないのかだけが疑問だった。

「……あれから何日だ」

監禁されたままであれから何日が経過したのか時間感覚が測れない。俺がここに連れてこられた理由は、有馬にやられて出血多量で死にかけてた際に俺のところへ近寄ってきた奴に命乞いをしたからだろう。

そう考えればここは俺を拾って助けてくれた奴の隠れ家だろうと推測できる。けれど家主の顔は未だ見たことが無い。もしかしたら既に見たことがあるのかもしれないが、傷だらけの時の記憶はないから分からない。

しばらく考え込んでいると遠くの方で扉の音がして、コツコツと階段を歩いて降りてくる音が地下に鳴り響く。

足音はやがてこの部屋の前で止まると、鍵を開けてこの部屋に入ってきた。

「そろそろ目を覚ましてる頃かと思ったよ、比企谷くん」

とても懐かしい声がした。顔を上げると、そこに立っていた人物は俺の恋人の雪ノ下雪乃の姉。雪ノ下陽乃だった。

「なんで貴方が……」

「それを言われたらこういうことになるけど」

そう言っただけで彼女が取り出したのは見た目は至って普通の一本の刀。

「喰種捜査官……ですか」

「あつたり〜！ よく分かったね？」

「簡単ですよ。日本は未だ銃刀法違反が存在するから一般人は銃刀のような武器は持てない。それならばその刀は普通の刀ではなくクインケ。クインケであるということはそれ即ち……って辺りの誰にでもわかる問題です」

「それもそうか。さて、本題に入ろうか比企谷くん。君は今Rc抑制剤が効いていると

いうことを覚えた状態で話を聞いて欲しいんだけど」

そう言つて彼女は胸ポケットから一本の注射器を取り出した。

Rc抑制剤。それを打ち込まれた者のRc細胞の活動を抑制するもの。それは主に捕まえた喰種に打ち込むが、人間にも打つケースは存在する。

ここでRc細胞について説明する。Rc細胞、正式名称は「RedChild細胞」で、その形状が身体を丸めた胎児に似ていることから由来しているようだ。人間の体内には微量ながらこれが存在しており、喰種は人肉の摂取によつてこれを赫包に蓄積する。その構造上、同族である喰種の体内にはそれが多く保有されている為、共喰いを行うことでより大量に摂取でき赫者化の推進が見込めるが、人肉に比べて遥かに味が劣ることからこれを実際に行う喰種は少ない。

喰種が人間よりも遥かに高い数値でRc細胞を持つことから、検査結果によつては例え人間であろうとも喰種と判定されてしまうケースはあるらしい。何故そんなケースが起こりうるかといえば、それは喰種特有の赫子が理由の一つにあるだろう。

喰種は赫子を使う際に赫包に溜め込まれたRc細胞を消費することで赫子を発現させる。そのRc細胞が高ければ高いほど強力な赫子にもなり得ることから、例え人間であろうとも検査結果によつては駆逐しなければならないのだろう。

とはいってもそれは稀にしか起きないレアケースだから普通なら起こらない。

閑話休題。

俺は今の状況を考える。俺が赫子を出せない理由と鎖を引きちぎるほどの力が出せない理由もRc抑制剤が効いていて喰種の特徴が無効化されているからだと分かった。そして目の前にはRc抑制剤とクインケを持った雪ノ下陽乃。

「断ることは……出来なさそうですね」

「よろしい。比企谷くんが冷静で助かるよ」

「自分の命を散らしたくないだけです」

「私も捜査官だからさ。比企谷くんをこうして匿ってるとバレただけで喰種対策法に引っかけたって処罰対象だから結構慎重なんだよ？」

雪ノ下さんの表情は変わらず笑顔を貼り付けた仮面を被っているように見えるが、今話を聞く限りではそうでは無いらしい。

「とりあえず……話だけでも聞きますよ。それに乗るかどうかは別とさせて頂きたいと思いますけど……」

「比企谷くんは必ず乗ってくれるよ、この話。だって、雪乃ちゃんも関わってくる話だからね」

「なんで雪ノ下の名前が出てくるんですか、ここで」

「だって、雪ノ下家に関する話だもの。雪ノ下建設が近々月山グループと提携を結ぶことになってるんだけど、どうも月山グループが怪しく感じるのよね」

月山グループ。それは日本において唯ならぬ権力を有している程の大企業。しかし喰種の俺はその実態を少なからず知っている。月山グループは全員が喰種であるということを。

確信はないようだが雪ノ下さんは月山グループは喰種なのではないかと疑っているらしい。だがその情報を何処から掴んだのだろうか。

月山グループと雪ノ下家が関係を持てば起こりうる未来の一つとして、雪ノ下雪乃が月山習の毒牙にかかる可能性もある。

「そういう事ですか……。そうやって雪乃を出汁にして脅すの良くないつすよ」

「悪いとは思ってるよ。私は雪ノ下建設を継ぐこともなくこうして喰種捜査官になっちゃったからあれなんだけど、少なからずお母さんとお父さんにはお世話になったしそ

の両親が危険な目に遭うのも忍びないじゃない？ 比企谷くん、お願いできるかな」

「いいですけど、高くつきますよ。この貸しは」

「もちろん。比企谷くんも何かあれば私が動ける範囲でなら頼っていいから。頼んだよ」

全く、この人は本当に人使いが荒い。けれど、それ以上に雪乃に毒牙のかかる可能性は無視できない問題だ。あの美食家のことだ。雪ノ下の存在に気づけば必ずアイツはやってくるだろう。

「めんどくせえことしてくれるな。……あの野郎」

11 決意

あんていくでバイトを終えた日の夜。シャワーを浴びながら雪ノ下先輩に聞いた話を思い出していた。あの日以来、この喉元まで出かかっているこの違和感の正体が分からずにいる。

比企谷先輩がいなくなってしまった理由の検討はついている。そして雪ノ下先輩のお姉さんが忙しくて連絡を忘れているということも。

雪ノ下先輩の話し方や仕草からはとても礼儀正しさが感じられて、さぞ立派な家柄なのだろうということは見て取れた。雪ノ下先輩の家柄の話を聞けばもしかすればとも思ったが、まだ一回しか会っていない僕にそこまでのことを話してくれるようには思えないので諦めた。

いくら考えても結論が出てこないのでは意味がないと、頭を振って気持ちを切り替える。

雪ノ下先輩の話を聞いた上で、僕が今何をすべきなのか。比企谷先輩が戻ってくるまであんていくを守る？それは当たり前だ。そもそもあんていくの問題は僕だけの問題ではない。では雪ノ下先輩を守る？それは雪ノ下先輩のお姉さんがするだろう。もし

雪ノ下先輩が危ないと分かれば比企谷先輩も意地でも守るだろうし僕が出張ることも無い。ならば僕が今するべきことはなんだろうか。

ここ最近では慌ただしくて忘れそうになっていたが、今回の件の全ての始まりはリョーコさんとヒナミちゃんや白鳩に追われていたからだ。

リョーコさんが捜査官に襲われたあの日。本当なら一番近くにいた僕がリョーコさんを守らなければいけなかった。僕が捜査官からリョーコさんを助けられれば比企谷先輩が戦闘する必要もなく、捜査官に目をつけられることもなかったはずだ。でも僕にはその守る力がない。それどころか自分の身を守るかも分からないのにそんな余裕はない。僕が出ていけばやられていたのはこちらなのは明らかで、あんでいくの皆に余計に迷惑をかけただろう。

「僕は……気付かないうちに比企谷先輩に守られてたんだ……」

仮に……僕に比企谷先輩みたいな強さがあつたとして、僕はあの捜査官と戦えたのだろうか。彼ら捜査官はヒトの平和のために、喰種を退治している。世間的には排斥されるべきは喰種なんだ。悪いのは……ヒトを殺して喰らう、喰種じゃないか。彼らは何一つ間違っていない……。間違つてなんか……。

「僕は……何も出来なかった……。僕は……この世界のことを知らなさすぎる……。クソッ……」

己の余りの無力さに悔しくなる。僕がもつと強ければ……。と。

ならば、僕が今やるべきことはなにか。……強くなることだ。トーカーちゃんや比企谷先輩のようにはいかないかもしれない。それはそうだ。トーカーちゃんも比企谷先輩も、強くなるために努力を沢山してきたのだろう。僕なんかが戦い方を習って、皆を守るような……。その領域にまですぐにいけるとは思えない。それでも。

「何も出来ないのは……。もう……。嫌なんだ……」

次の日。あんていくでバイトに勤しむ僕とトーカーちゃん。店内にお客さんはおらず、話すなら今しかないと思つた。

「あの……。トーカーちゃん……」

「……。んだよ」

僕の事なんか欠片も興味がなさそうな態度で適当にあしらわれる。怯んじやダメだ。強くなつて、僕も戦えるようになりたいんだから。

「僕に……戦い方を教えて欲しい」

「……なに急に。教わつてどうすんの？」

「守りたいんだ……皆を」

「……アンタみたいな小心者ヘタレが……皆を守る？ ふざけんな。アンタに守られるほど弱くねえよ。そんなこと言つてるけど、アンタに白鳩を殺せるの？」

「……！」

？
そうだ。戦い方を学び皆を守るということは捜査官との殺し合いになるだろう。四方さんの死体運びに付いて行つた時に吐き気を催す僕に……果たして出来るのか……？

「僕には……」

「できねえだろ？ それに……なんで店長達が比企谷さんを詳しく探さないか分かつて

んの?」

「それは……」

「比企谷さんを倒せる程の白鳩がこの近くにいるかもしれない。そんな危ない状況でアタシ達は千葉に行つたんだよ」

「でも! あんていくは助け合いだつて!」

「……まで言われなきや分かんない? アンタに……全ての白鳩を相手にする覚悟はあるの?」

「そうだ。雪ノ下先輩に話を聞いて僕は分かっていたじゃないか。比企谷先輩が白鳩に連れてかれた可能性があることを。それでも、僕はやらなくちゃならない。皆の足を引つ張らないためにも。」

「確かに、僕にはヒトは殺せない。でも、比企谷先輩が戦つてる姿や、雪ノ下先輩の話も聞いて強く思つたんだ。人や喰種が死ぬのも、それが僕の知っている人だったら耐えられない。もちろん……トーカちゃんがこの先さらに比企谷先輩を追つて死ぬようなことがあつたら……悲しいよ。だから……僕に戦い方を教えて欲しい」

「……フン、アンタにしちゃ珍しくやる気じゃん……クソカネキ。いいよ、教えてあげ

る。バイトが終わったら着替えて待つてな」

バイトの時間が終わって、更衣室で自分の私服に着替えた。しばらく待つているとトーカちゃんが更衣室から出てきてから着いてきてと言うので領いた。あんでいくの奥の方に行つてから下へ潜つていく。到着して中に入つてみると、そこにはとても広い地下の空間が広がつていた。

「あんでいくの地下にこんな場所が……」

「昔の喰種が作った地下道。人間たちから身を隠すために。この先には進むなよ？ 一人で行つたら迷つて二度と出られないから」

トーカちゃんに注意事項を教わつてから、動きやすいようにトーカちゃんと僕は上着を脱いだ。

「アンタは本当は同じ鱗赫の比企谷さんに教わつた方がいいんだらうけど……仕方ないか」

苦笑いを浮かべると、トーカちゃんがこっちに振り返っていてじつとこちらを見つめながらまた喋り出す。

「アタシは比企谷さんみたいに口で教えるのそんなに上手くないし、そもそもアンタには説明しても分かんないだろうから……私が小さい頃に教わった時と同じやり方でやる……死ぬかもしれないから覚悟して」

「……へっ?」

どういう意味か分からず首を傾げると、トーカちゃんは素早く僕の懐に踏み込んでから拳で腹に一撃を入れてきた。

「ぐっ……っふ……っふ……」

衝撃に耐えきれなくて、おえええッと思わず吐き出しているとトーカちゃんに待ったをかける暇もなく足を僕の身体に振り抜く。

重い一撃を貰って僕の身体は軽々と吹き飛び柵にぶつかって倒れると、トーカちゃんはゆっくりとこちらに近づいてきて、僕の眼帯を取った。

「……イマイチ危機感ないみたいね」

そう一言だけ呟くと、僕の中指をつま先で上げて力を入れられた。

「トツ……トーカちゃん……?」

「折るよ、アンタの指」

そのまま足を下ろされて、僕の中指は本来曲がらない方向に容易く曲げられて骨の折れた音が地下道に鳴り響いた。その痛みに耐えきれなくて悲鳴をあげる。

「アアアアアああああアアアアアアアアアアアアアアアア」

「明日にはくつついてるわよ。……でも」

これはスグには治らないわよと言うと同時に羽赫が発現していて、こちらに攻撃をしようとしているのが見て取れた。

「そのまま死ぬかもね。……その時はその時、こっちで処理してやるから」

本気で僕が死んでもいいと思っっている目だった。トーカーちゃんがそのまま羽赫を振り下ろしてきて、嫌だ、死にたくない！と強く思った時だった。

僕の腰から二本の触手が出てきていて、トーカーちゃんの赫子による攻撃を防いでいた。

「……やりや出来んじゃない。ま……この前の赫子の方がもっと強力だったけど。上に戻るよ」

その後は上に戻りながら、僕の赫子はリゼさんと同じ鱗赫の喰種だとか、鱗赫の特徴等を教えて貰ってその日の訓練は終了した。

「とりあえず……まずは自由に出し入れ出来るようになるまで赫子を引き出す感覚を身体に焼き付ける。赫子が出せない時の接近戦も叩き込むとして……あとは身体作りか」

今後の予定をサラッと僕に言ってから僕のシャツを捲った。

「アンタひよろすぎ。こんな身体で戦うつもり？ もつと肉つけろ。とりあえず腹筋・背筋・腕立て・スクワット一〇〇回を毎日。いいね？」

「一〇〇回!?!」

「何？なんか文句ある？」

「い、いえ……やるよ……やります……」

「分かりやあいい」

トーカちゃんに口うるさく言われている時。店の扉が開いて入ってきた人を見ると、そこにはウタさんが立っていた。

「あれ、ウタさん」

「ウ、ウタさん……なん……」

「なんか……ゴメン」

ウタさんが突然入ってくるなり謝ってきたので何かと思ってみれば、トーカちゃんが未だ僕のシャツを捲りっぱなしだった。

「あ、や……ち、違います！ そんなんじゃ……！　　とうか、どうしてお店に……？」
「……カネキくんのマスクが出来たからスグに届けたくて……ホントは置いて帰ろうと
思ったけど……折角だから、カネキくんが付けてるトコ見たいな」

言われるがままに付け方を教えて貰いながらマスクを付けると、僕が普段眼帯を付けてる反対の左目だけが開けている黒い菌茎が剥き出しのマスクだった。

「……どう？　……カネキくんっぼく眼帯風にしてみたんだ」

「眼帯……普段僕がしている方と反対なんですね……」

「うん。……隠している眼の方が見たかったから」

冷たい革の質感と普段と逆の目から覗く世界は、不思議と僕の気分を高揚させていた。

1 2 王座

20区で行われた比企谷八幡と有馬貴将の戦闘から数日後。CCGでは有馬貴将からの報告を受けるために特等会議が行われていた。

「……以上です」

「報告」苦勞、有馬特等。丸、今の報告を聞いてどう思った」

「悪魔に似た様相の赫者、二種持ち、そして有馬貴将と真つ向からやり合って傷だらけながらも逃げ帰れるだけの体力を残しておくる冷静な判断。同じ隻眼っていう繋がりからも、隻眼の梟と同等の力はあると見て良さそうですね」

有馬貴将が比企谷八幡の力を見たかっただけの為に、敢えて殺さずに自分から戦闘の終わりを告げて逃がしたのが事の真相。しかしそのまま報告をすれば不味いのは誰にでも分かる事なので有馬貴将は比企谷八幡には逃げられたと嘘の報告をしていた。

有馬貴将は喰種と喰種捜査官の両方からCCGの死神という異名を知られる程の捜査官。そんな捜査官が嘘をつく意味はないと思っっているからこそ信用してしまう。

丸出特等の発言に反論する特等は誰もおらず、静かな空気が流れる。それを打ち破るように和修吉時は最終的な結論を述べた。

「では隻眼の悪魔改め、通称『デビル』のレートはSSSレート喰種とする。単独での戦闘はなるべく避けるように。以上で特等会議を終わりにする」

そして喰種捜査官全員に新たに指定されたSSSレート喰種『デビル』の現状分かっている情報が共有された。その日のCCG内はデビルの話で持ち切りになっていた。

その一方。あんていく。その地下ではカネキがトーカによる地獄の特訓を受けていた。

「腰抜けヤロー、もっかい指折ってやろうか？ あんな角砂糖に頼ってるから力が出せないんだよ。分かってんの？」

「だって……僕人肉は食べたくないっていうか……食べられないっていうか……」

元々は人間だった僕に人肉を食えと言うのがそもそも無理な話だ。だから角砂糖に

頼っているのだし。

「まだそんなあまつちよろいこと言ってるんのかよ。また飢えで苦しみたいならアタシは止めないけど、次はもう面倒見てやらないからね」

「……分かってる」

「また仕事終わりに特訓やるよ。それと……明日ちよつと付き合つてよ。比企谷さん探したいから」

「……うん、分かった」

悔やんでいても仕方ない。とにかく今は強くなることと比企谷先輩の搜索を頑張らないと気持ちを持ち直してその日はあんでいくの仕事に集中した。

そして次の日。トーカーちゃんに言われた通りにあんでいくに向かうと、既にトーカーちゃんは僕のことを待っていた。

「トーカーちゃんが先に来てるって珍しいね」

「なんか文句でもあんの？」

「そういう訳じゃないけど……」

「とりあえず、今日は20区を探すよ。店長に比企谷さんの住所は聞いたからとりあえずそこに向かう」

「その道中に何か痕跡があれば……ってそういう事？」

「そ。初めからこうしておけば良かったね。店長も知ってんなら言ってくればいいのに……」

そう愚痴を漏らすトーカちゃんを宥めながら歩き出す。それにしても店長はどうやって比企谷先輩の住所を知ったのだろう。四方さんも知らないと昨日あんでいくで言っていたのに。やっぱり店長は謎が多い人だ。

トーカちゃんに道案内をしてもらいながら歩いているが、今のところは何も変わった様子はない。が、歩いていく程に住宅が少し増えてきている印象がある。

「なんか段々と静かになってくね」

「まア比企谷さんは静かな場所好きだしねっ……！ クソカネキ、その路地入るよ」

「えっ、なん……」

「いいからさっさと来い！」

いきなり様子が変わったトーカちゃんに引つ張られて路地に入ると、トーカちゃんは顔を少しだけ覗かせてから路地の深い所まで僕を引つ張っていく。

いきなりの事で訳が分からず戸惑う僕にトーカちゃんがぼつりと話し出す。

「二人組の箱持ちの白鳩がいた。アンタ知ってんじゃないの？」

「それって……リョーコさんを襲つてた人じゃ……！ ガタイの良い人と白髪のヒョロつとした人でしょ？」

「やつぱりそうか……。アイツらまだこの辺嗅ぎ回つてたのか……。リョーコさんとヒナミが安心して暮らす為にも……やつぱり殺すか」

トーカちゃんが捜査官の人達に殺意を向ける中で僕は顔を足元に向けると、地面には血の跡と赫子で傷ついた跡が残っていた。

「トーカちゃん、足元のこれ……」

「血の後。赫子痕も残ってる。これは……鱗赫と羽赫の後つばいな。しかも結構派手にやり合つた感じの」

「その血痕が路地の先に続いているけど……これもしかして……」

「やつと見つけた。比企谷さんが途絶えた痕跡らしきもの。今表に出て比企谷さんの家に向かおうにも白鳩がまだいるだろうし……行くよ」

トーカーちゃんと僕は逸る気持ちを抑えて血の跡が続いた方に走る。まだこれが比企谷さんのものだつて決まった保証はない。それでも、やつと見つけた小さな手掛かり。これを逃してはならないと僕とトーカーちゃんは走つて更に奥へと向かつていく。

金木とトーカーが比企谷を探している同時刻。20区の某所で八幡は月山と対面していた。

「よう。お前が美食家、月山習でいいんだよな？」

「そうだとも。そういう君は……今話題の隻眼の悪魔くんでもいいのかな？」

「確かにそれは俺で間違いないな」

「そうかい。それで、僕に何か用かな？」

飄々と話す月山と話を進める比企谷。実際に会うのはお互いに初めての二人のその場の空気は今にも交戦しそうな一触即発の空気が流れていた。そんな事に気にかける様子も勿体ないのか比企谷は本題を月山に切り出していく。

「お前のグループが近々、雪ノ下建設と提携を結ぶって聞いたんでちよつと会いに来たんだけど」

「その事か。君がどう関係しているのかは分からないけれどわざわざ僕に会いに来るということは……その雪ノ下建設のゴ令嬢の二人には手を出すな、そんな所かな？」

「分かつてんなら話が早いな。手を出せば俺がお前を殺す」

「あのCCGの死神と恐れられる有馬貴将と真正面から戦つて逃げ帰れる君と殺り合いたくはないからそうさせてもらうよ」

じゃあこれで話は終わりだと月山は静かにその場を立ち去ろうとしている所を比企谷が引き止める。

「まだ何か用かな？」

「もう一つだけ、頼まれ事をして欲しいんだ。あんていくはお前も知ってるだろ？」

「もちろん。彼処はいい珈琲を出してくれるし、あんていくの皆は良い人達だからね」

「そこに今、笛口親子が居るはずなんだ。本来は俺が面倒を見ると約束してんだが、ちよつと今は忙しくて様子も見に行けないからお前に様子を見てきてほしいんだ」

「そうだね……僕も久々にあんでいくの珈琲は飲みたいし、いいとも。珈琲を飲みに行くついでに聞いてきてあげるよ。その代わり、貸し一つになるけど構わないかな？」

「構わねえよ。何か頼まれ事の一つなら聞いてやる。勿論、内容にもよるけどな」

不敵に笑う比企谷に手をひらひらと振りながら月山はその場を立ち去る。比企谷が月山の後ろ姿を見つめる後ろからもう一つの視線が比企谷を見ている。それに気づいた比企谷は振り返ってその人物に声を掛ける。

「丁度いい所に来たな、エト。その姿の時は高槻泉って呼んだ方がいいのか」

「やあやあ、君が有馬貴将と交戦したと聞いて探してたんだ。それでどうだった？」

ニコニコとしながら高槻泉は比企谷にその時の戦闘がどうだったかを問い掛けるも比企谷は害虫を潰したような表情でその時を思い出しながら語り出す。

「あれは本物の化け物だった。今の俺じゃあ勝てないな。この先も勝てる気はしねえけど。なんせ俺が赫者化してやっと制御できたのに手を抜かれてたしな」

「君でも勝てないか、アレには」

「で、その有馬貴將の口からお前の名前が出たんだが……あれはどういう事だ？」
「アイツ……面倒だからって説明をこっちに投げたな。やれやれ……」

仕方ないと肩を竦めてエトは有馬貴將との関係を比企谷に話し出す。この歪んだ世界を壊すために手を組んだこと、彼が喰種と人間のハーフである半人間のこと、それから有馬貴將が隻眼の王であることと彼が隻眼の王である意味も。

「つまり……奴程の捜査官を殺せる喰種が現れば、喰種たちの希望になると」

「そういう事だ。それに一番近いのが君だったから私も君に期待したし、有馬も君に会いに行つただけど……」

「それじゃ俺には荷が重すぎるって話だ。俺にはアイツを殺せるビジョンは全く見えてないからな」

比企谷は話を聞いて、それをなし得てくれそうな人物を頭の中で探す。一人だけ心当たりはあるがその人物がそこまで強くなつてくれるか保証がない。正直に言つて先が思いやられる話だった。

「有馬貴將は半人間だ。だからこそ奴にも時間はない」

「だが、奴を殺すのに一番近いと思われる俺でも駄目。そうすると……育てるしかねえな。それをなし得てくれそうな人物を」

「君もその判断に至るか。私的には君が育つてくれるのが一番早いけど」

「何度も言つてんだろ。俺じゃ無理だ、諦めろ」

仕方ないと諦めるエトに思い出したように比企谷は別件について尋ねる。

「お前の組織……アオギリの樹だっけか。とある喰種の親子を少し匿つて欲しいんだが平気か？」

「出来なくはないだろうけど、タダでそれを引き受ける訳にはいかないな。あの組織も安全つて訳じゃないし、好戦的な喰種は沢山いるからね。命の保証は出来ない。君が条件を飲んでくれるなら考えなくもないけどね」

「その条件つてのは？」

「君がアオギリの樹に入つて、その親子の面倒を見ること。それと……君が隻眼の王を名乗ることだ。勿論本当にその座に着けと言うわけじゃない。あくまでも有馬貴將がそうだと思わせないためだ」

「入るのは想定してたからいいけど……俺なんかが隻眼の王を名乗っていいものなのかよっ。」

「有馬貴将が喰種と手を組んでいるとは今のところバレていないが念には念だ。君の实力的にも白鳩にそう思われていてもおかしくはない。一時的でいいんだ。君が、喰種達の希望になってくれ。これは有馬貴将の望みでもある」

俺がそんな大層な物に座していいものなのか不安が残る。しかし有馬貴将にも時間はなく、このまま有馬貴将が先に寿命を迎えれば隻眼の王は二度と誰にも名乗れなくなるだろう。それならば、俺が一時的にその座に着いて、俺がアイツを有馬貴将を殺せる程に育てればいいんだ。

そもそも笛口親子の面倒を見ながら守るにはアオギリの樹に入るしかない。あんていくに任せてもいいとは思ったが、20区には未だに笛口親子の顔を知っている捜査官がいるし、リョーコさんとヒナミはまともにも外にも出られない。選択肢はあるようで最初からないようなものだった。

「……あくまでも笛口親子の為だ。そのために、今のところはアオギリの樹に入って俺が隻眼の王を名乗る。……つたく、俺には荷が重すぎるつてのに」

「組織の運営はタタラさんと私がやるから君はあまり気にしなくていい。いざという時にその名を名乗って喰種達の希望になってくれるだけでいいんだ」

「あんまり期待はするなよ」

「分かってるさ。一刻も早く有馬貴将を超える喰種を作らないとね」

俺が喰種達の希望に、ねえ……。重すぎる称号だが、やるしかねえな。リョーコさんとヒナミを守るためにも。

隻眼の王。その名は比企谷に重くプレッシャーとなつてのしかかっていた。

13 弟

エトに連れられて1-1区に足を運ぶと、連れてこられた目の前には壁が剥げてコンクリート剥き出しの灰色が見えている廃墟が建っていた。

連れてこられた廃墟の中に入ればあちこちに染み付いている血痕は今にも生臭さも感じてきそうな程に飛び散っていて、ここまで血が染み付いた状態になるのに一体何人もの人や喰種が死んできたのだろうか。

「少し生臭いかもしれないけどごめんね。組織を運営するには食糧の人間が欠かせないから」

「まあ仕方ないだろ。いくら喰種がしばらく食わなくなつて平気だろうと食わなきや俺たち喰種も例外なく死ぬからな」

「何もせず平穏な暮らしなら一ヶ月は持つだろうけどね。うちの活動の内容的にも戦闘とかは頻繁に起こるからそこまでではもたない」

人間だって無限にいる訳じゃない。人間を狩り過ぎれば喰種を恐れて人はその区か

ら遠ざかる。遠ざかれば当然食糧も手に入らないしそのうちこちら一帯はゴーストタウンになる。

「純粋な喰種は大変だな。人肉しか食えないんだから」

「その分私と比企谷くんは半喰種だからその心配もいらぬしね」

エトの後ろを歩きながら世間話を語り合っていると開けた場所に出ていて、その奥にはタタラを含む幹部と思わしき喰種が何人かいた。

「タタラさん、連れてきたよ。比企谷くん入ってくれらるって」

「ま、一時的にな。止むに止まれぬ事情があるもんで」

「そうか。少し待ってろ」

俺とエトとタタラの三人だけで話をしたいのかタタラは他の幹部に部屋の外に出るように命じる。それに従って幹部共が部屋から出ていって部屋には三人だけの空間が出来上がった。

「それで、王になる決心はついたのか？」

「いいや出来てない。それに俺は有馬に負けたから王にはなれねえよ」

「未だ、王の望みの物は手に入らないか」

「戦つてみたがあれは相当な化け物じゃないと倒せないだろ。だからこそ俺とエトは確信した。いないなら育てればいい、つてな」

「……リゼ持ちの事か。信用できるのか？」

「なにかきっかけがあればつて所だな。今はまだ喰種になつたばかりでこの世界の事を知らないお坊ちゃんだから、まあこれからどうなるかつて所だろ」

これは正直賭けだ。もし何かきっかけ一つで化けるならアイツは嘉納の最高傑作になるのだろうし、化けられなかつたらそれまで。喰種として平穩に暮らせばいい。そう
なつた時はまあ俺が頑張るか別の喰種を作るのかつて所だろう。

「比企谷、とりあえずお前にアヤトの班を任せる」

「はいよ。そのアヤトつてのが誰かは知らんけど」

「呼んでくるから待つていろ」

そう言つてタタラはアヤトという奴を呼びに部屋を出て行って、部屋の中にはエトと俺だけが残されていた。

「とりあえず比企谷くんは表向きは幹部扱いだけど、いざとなつた時は王として働いてもらうよ」

「へいへい。こき使われるつてことね」

「とは言つても当分は普通の活動だから安心していいよ。君が王として働く時は白鳩が派手に動いた時だけさ」

「一時的に預かつているだけとはいえ、俺なんか王になるつて……俺より強いやつ絶対いるだろ……」

「有馬と殺り合つて逃げ帰れるのは私の知る中じゃ私と君、それからタタラさんも逃げるかな？ それぐらいだから仕方ないさ」

エトと話を繰り返していると、タタラが戻ってきてその後ろにはまだ中学生か高校生になつたばかりぐらいに若い喰種がいた。

「で、そいつがアヤトつてやつか？」

「ああ、そうだ」

よく顔を見ると、そこはかたなく霧嶋に似ている顔付きだった。霧嶋に兄弟がいるという話は聞いたことが無いが、俺が知らないだけなのだろうか。

タタラにはもう行っていいと言われたので部屋を出てアヤトと呼ばれる若い喰種の後ろを歩いていく。

どうしてもその雰囲気や容姿が霧嶋と重なって見えるのが気になって思わず問い掛ける。

「お前、上か下に姉妹とかいたりするか？」

「平和ボケしたクソ姉貴が一人な。それがなんだよ」

「いや、どうも似てたから確認が取りたかっただけだ。気にするな」

言葉遣いや髪の毛の色や猜疑心の強さから目付きの悪さなんかも見れば見るほど知り合ったばかりの頃の姉にそっくりだった。

タタラに押し付けられたとはいえ彼女の弟なら面倒を見るのも吝かではないのでよろしくと手を伸ばせば、アヤトは俺の手を叩いて振り払う。

「俺はまだテメエの事を認めたわけじゃねえ。馴れ馴れしくすんな」

「姉弟揃って性格尖ってんのな……」

ヤレヤレと溜め息をつくとき、アヤトは舌打ちをしてこちらに振り返った。

「そもそも、なんでテメエみたいな半端野郎が俺の上に付くんだよ」

「半端野郎かどうか……試してみるか？」

右眼を黒くさせて指の関節をパキパキ鳴らす。

そもそも説明をちゃんとしていればここまで尖ることはないだろう。タタラの奴に押し付けられた理由もなんとなく分かる気がして溜め息すら出ない。

「いいぜ、テメエが俺の上に立てるのかどうか試してやるよ」

「……何様のつもりか知らないが。お前の思い上がった鼻へし折ってやるからさつさと来いよ、アヤト」

なんだか霧嶋……ここはトーカと呼ぶべきか。トーカと知り合ったばかりの時もこんな感じだったなと思いつながらアヤトに向き直る。相手が誰であろうと突っかかってくる様は姉のアイツにそっくりで、本当に姉弟なんだなと改めて実感する。

「今更後悔してもおせえからな」

アヤトは両目を黒くさせながら背中から羽赫を出して掃射する。それを全て躲しなから懐に走り込んで腹に一撃入れる。

腹に容赦なく放った俺の拳はアヤトに見事に突き刺さって思わず痰と血を吐き出していた。

「ほら、こんなもんじゃないだろ。教育し直してやるからもつと本気で来いよ」

初めてトーカと組み手をした時のような懐かしさを思い出しながら俺は未だこちらを睨み付けてくるアヤトを見下ろした。

14 力の差

たった一撃。それだけでアヤトは蹲って倒れる程のダメージを負っていた。

それが意味指すもの。つまり――

「まず俺とお前じゃ基本的に格が違うって事を知れ。その上で、今お前の持てる全ての力でかかってこい」

八幡はアヤトより遥かに強い。そんな事は今の一撃で分かる。しかしアヤトにも譲れないものがある。

(クソ親父は弱いから死んだ。だから俺は強くなる。こんな所でへばつてられるか)

まだ幼い頃のアヤトとトーカの面倒を見てくれていた父。

その父が突然帰ってこなくなってしまうということは、父は捜査官に殺されたのだとあの頃の幼い姉弟は理解した。

嫌な記憶を思い出して苦虫を嘔み潰したような顔をして目の前の男に向き直ると、八幡は変わらず冷めた目で此方を見ていた。

「いつまでも上から目線で調子乗ってんじゃねえよ……。クソヤロオ！」

アヤトが背中に生えている翼を広げると、八幡の身体が一瞬ビクついた。その反応を見たアヤトは見逃さなかった。

「ガラ空きだ、バーカ！」

動きが一瞬だけ鈍くなった隙を突いた攻撃。これは確実に入るとアヤトは思った。

「同じ実力ぐらいの相手ならそれでも攻撃は入っただろうがな……。言っただけで格が違うって」

八幡は身体を少し捻るとアヤトの繰り出した拳が目の前を通った。身体を捻った勢いに任せて回し蹴りでアヤトを壁に叩きつけた。

「が——っ!？」

「今の攻撃は中々だったな。ただ、まだ単調過ぎる。攻撃する時は一手先だけ読んでも足りないぞ。三手先まで読め」

「……っ。く、そがア！」

この組織に入ってからアヤトは子供扱いされるのがうざくて仕方がなかった。今だって八幡に教育と言われて子供扱いされている。

確かに自分の年齢は一般的には子供なのだろう。それでも、証明したかった。自分は強いんだと。

父を殺され、一緒に生きてきた姉とも人間への価値観の違いから決別。それからはずっと一人で戦ってきた。

「一つ聞きたいんだが。アヤト、お前は何のために戦ってる？」

「何のため、だと？ んなもん、クソツタレな人間共をぶっ殺すために……」
「本当にそれが理由か？」

目の前の男を見ると、その片方だけ赤黒く染まった眼はアヤトの全てを見透かしているかのようにならけられていた。

確かに人間は大嫌いだし殺したい程に憎んでいる。けど、そんな理由で戦ってるのかと言われたら多分違うだろう。

本当は分かっていたのだ。自分がなんのために戦っていて、この組織に入ったのかを。

力が欲しかったのだ。たった一人の家族を守る程の力が。

姉は今では人間の通う学校で居場所を持っていて、幼い頃のように人間社会に溶け込んで暮らしている。

人に憧れる姉はとても眩しかった。だからこそ守りたかった。

もう失うのは嫌だから。父の時のように弱い事が理由で白鳩に殺されてなるものかと。

そんな心のどこかで無意識に考えていたアヤトの心を、目の前の男は見抜いているのだ。それも相まって、気に入らない。

「その眼が気に入らねえ。なんでも知ってるかのように見えてくるテメエのその眼が。」

「お前の姉を見てれば、弟のお前の考えてることくらい分かるってだけだ。守りたいんだったら強くなれ」

先の戦闘でアヤトは分からされていた。今の自分ではこの男に一矢報いることも出来ない。

自分は赫子を出して戦っているのに相手は全く赫子を出しておらず、こちらを赤子のようになしているからだ。

「ちつ……テメエの事は気に入らねえし、ムカつくが……今はまだ勝てねえし、黙って言う事だけは聞いてやる」

「分かってもらえたなら良かったわ。組織の事は俺には全然わからんから当面はお前にその辺は任せるとして……俺がお前にしてやれるのは、特訓だな。それに、お前はまだ羽赫の使い方がなつてねエ」

「はあ？　羽赫の使い方だと？」

この男は一体何を言っているのだろうか。

これでも自分はこの組織の幹部でそんじよそこらの喰種よりは強いつもりだ。

それでも尚この男は言い放つたのだ。お前はまだまだ雛鳥だと。

「今までずっと一人で戦ってたんだらうから教えてくれる奴もいなかったんだろ？」

「だからなんなんだよ」

「まア……俺も同じ羽赫持ちだからな。お前の赫子の使い方見てりや、お前の実力がどの程度かは何となく分かるんだよ」

そう言つて八幡は背中から赤黒い羽を伸ばしたが、その様子はアヤトの羽とは全然違つていた。

「なんなんだよ、その形状は……」

赤黒い羽なのは間違いない。それでも、アヤトの羽赫と八幡の羽赫では明確に違いがあった。

アヤトの羽赫は流動的なのに対して、八幡の羽赫はブレードのように硬質化されていて形状を保つていた。

「お前は羽赫が他の赫子よりRc細胞の放出が激しい理由を理解してるか？」

「知らねえよ。考えた事もねえ」

「羽赫は他の赫子より消費が激しいから長期戦は出来ない。だがその分、赫子の中では

最も攻撃的だ。その理由は、他の赫子と違って攻撃手段が多いからだ」

他の赫子は形状がある程度決まって発現するのに対して羽赫は人によって形状が常に変化する。

「羽赫は一般的には遠距離戦の得意な赫子と言われるが、近距離戦が出来ない訳じゃない。お前は他の羽赫がこうやって形を保ってるのを見たことはないか？」

「……中にはいた。だが、そういう奴らも決まって遠距離戦だ」

「だろうな。そこら辺の奴らなら普通の格闘技で通用するだろうが……強い白鳩とか喰種になると、それも通用しなくなる。その為にも、羽赫の形状変化ぐらいは出来るようになれ。じゃないと……何も守れないぞ」

「……つせエな。言われなくたってやってやる」

グツと握り締めて何かを決意したような顔で八幡を睨んでいた。

15 再会

「今日はここまでだな」

「クソがつ……。またテメエに一撃も入れらんなかった……」

「まあ初めて会った時よりマシになってるからそう焦んなよ」

「アヤトを鍛え始めて数日が経過。今日も相変わらずアヤトと組手をしながらそうじゃない、こうしろとアヤトの身体に叩き込んでいる。」

「まだ数日しか経ってないとはいえ、少しずつ実力が伸び始めているアヤトを見ていると意外とくるものがある。これが親心って奴なのだろうか。違う気がするが。」

「そういうや、と思い出したようにアヤトの方を一瞥した。」

「この後ちよつと出てくるから留守番頼むわ」

「あ？ 何しに行くんだよ」

「組織絡みじゃなく個人的な用があるんだよ。夕方には戻る」

「あんま勝手な行動するんじゃないぞ。いくらお前だろうとタタラに言われんぞ」

「わーってるよ。だから夕方には戻る。一応番号渡しとくから、何かあれば掛けてくれ」

「さらさらと紙に俺の電話番号を書いて渡すと、アヤトはハア？と言いたげな顔をして

いた。

「何言つてんだ、お前。電話なんか持つてるわけねーだろタコ」

「……なに？ 持つてないの？」

「どうしたらンなもん持つてるように見えんだよ」

そりやそうだ。こいつは餓鬼の頃から一人で生きてきたんだから文明の利器なんて大層なものを持つてる方がおかしい。

仕方ないと溜息を吐きながら俺は財布を取り出して千円札をアヤトに渡した。

「じゃあ今はとりあえず近くの公衆電話からでいいから何かあったら電話してくれ。携帯帯は近いうちに用意してやるから待つてろ」

「いらねえよ。そんなもん持つてたつて壊れるだけだろうが」

「そんな頻繁に戦闘する訳じゃないだろお前。今日みたいに俺がいない日はこれからもあるだろうし連絡手段くらい持つててくれないと困るだろ」

「分かったからさっさと行つてこい」

俺を追い出すようにあしらわれアジトを出ると、タタラが外で待つていた。

「どうした？ 俺に何か用か？」

「王からの伝言だ。近いうちにまた会いに行くと」

「今更俺に何の用があるんだよ……」

タタラの口ぶりから察するに、俺は有馬貴將に気に入られてしまったらしい。どうして俺の周りにはこんなんばっかりなのだろうか。

「俺に平穩をくれってんだよ……。まあ分かった」

伝える事を済ませたらもう用はないようで、タタラは俺の横を抜けてアジトに入ってしまった。

「さて……月山はあいつらに伝える事ちゃんと伝えてくれたんだろうな」

様子を見に行きたい気持ちを抑え、雪ノ下さんに頼まれた事を守るために数年ぶりの地元へ俺は足を運んだ。

数年ぶりの地元ということで辺りを見回してみたが、特に街並みも変わっておらず懐かしい気分だった。

今日の目的は本日行われる月山家と雪ノ下家の提携が無事に終わるかを見守る事だ。

跡継ぎになる月山習には釘も刺しておいたので問題ないだろうとは思っているが、念には念をなんて言葉もあるくらいだから警戒するに越したことはない。

それ以外で懸念点があるとすれば俺の知り合いと鉢合わせないかとかその辺のものだが、遭遇することの方が低いと思うから平気だろう。

「あれ？ 結衣、こいつヒキオじゃね？」

「ヒッキー……」

「なんでこのタイミングで会うんですかね……」

声が出た方に振り向くと、三浦と由比ヶ浜が立っていた。

というか、数年ぶりとはいえよく俺だと気づきましたね三浦さん。いや、特徴的なアホ毛に姿勢の悪さは全く変わってないし見りや分かるか。

「ヒッキー戻ってきてたんなら連絡してよ！」

「いや、今日はたまたまこつちに用事があつて来てただけだから……」

「だって、ヒッキー大学教えてくれないじゃん」

由比ヶ浜はムスツと頬を膨らませて、私怒ってますアピールをした。

俺の変わらない態度を見て呆れたのか三浦も口を挟む。

「だとしても連絡くらいするのが普通じゃん？ あんた、結衣と仲良かったんだし。それに、数年も連絡なかったら心配するっしょ」

「それはそうなんだろうが……今日は本当にたまたまだったから連絡する必要はないと思っただよ」

本当は会うつもりはなかったとは言える雰囲気ではないのでそこは黙っておいた。

こいつらは人間で闇の世界なんて知らないような奴らだ。

そして俺は喰種で既に闇にどっぷり浸かっている立場なわけで、尚更巻き込む訳にはいかない。だからこそ連絡もせず突き放したかったんだが、由比ヶ浜や三浦のお人好し

は全く変わってないようで、こんな俺の事も心配してくれているのだからいい知人を持ったと言えるだろう。

「ヒツキー、今時間ある？ 久々に会ったんだし何処か入ろ！ 優美子もいい？」

「いいんじゃない？ ヒキオがどうしてるとかは興味ないけど、近況報告くらいは聞いたげる」

携帯で時計を見ると、雪ノ下家と月山家の会合までまだ少しなら時間はある。こいつらが喰種に狙われないかの心配もあるし、少しだけならいいか。

「……少しだけだぞ」

「やった！ じゃあ行こ！ ハニトーでいいよね？」

「……なんでハニトー？」

「だって、高校生の時に約束してたのにまだ一緒に行ってないし……」

「あー、そういう事ね……まあ、いいんじゃない？」

渋々了承すると、由比ヶ浜は花のような笑顔で三浦と俺の手を引っ張って歩いていく。

近道だからと由比ヶ浜は裏路地に入ろうとしたところで俺は待ったをかける。

「裏路地は危ないから通らない方が良くねーか」

「なんで？」

「いやほら、喰種とかいるかもだしさ……」

「あー、なんか人と同じ姿をしてるっていう？」

「そうそう。襲われたら俺ら何も出来ないだろうし……三浦もそう思うだろ？」

三浦に助け舟を求めると、少し考える素振りを見せた。

「危ないかもだけど、ヒキオ時間ないんしょ？通るだけなら平気じゃね？」

口ぶりから察するに、普段なら止めているのだろう。

「ほら、優美子もそう言ってるし！早く行こー！」

「あ、おいー」

絶対危ないと思うから止めたのに由比ヶ浜は久々に俺に会えてそんなに嬉しかったのか聞く耳を持たずに三浦と一緒に俺を置いて先に入ってしまった。

何かあった時は俺が何とかするしかないかと考えながら追いかけると、由比ヶ浜と三

浦の悲鳴が聞こえた。

走って追いつくと、案の定そこは喰種の巣窟だった。

「こいつ兄ちゃんの連れかい？ 悪いがこいつらは俺らが貰ってくから兄ちゃんはここで死にな」

「ひ、ヒッキー……」

周りの喰種達は既に赫子を出していてやる気満々のようだ。

俺が本気を出せば簡単に切り抜けられるのかもしれないが今は三浦と由比ヶ浜が一緒にいる。

高校の頃は頑張つて誤魔化し続けていたが、ここらが限界なのかもしれない。

何れにせよ、いつかはバレてた事だ。それが早まっただけだと思えばいい。

「だから言つたのに……今はここを切り抜けることだけを考える。由比ヶ浜と三浦、怪我したくなきやそこ動くなよ」

どういう意味だと三浦は問おうとしてくるが時間はない。

俺の右眼だけが赤黒く染まると、周りの喰種や三浦と由比ヶ浜も驚きを見せた。

「嘘……だよな？ ヒツキー……」

「ヒキオ……あんた……」

「まあ……こういう事だ。バレるのが嫌だったからあんまり一緒にいたくなかったんだよ……」

バレてしまった以上、元の関係には戻れない。だが、今はこいつらを守ることだけを考える。

「さあ、やろうぜ。かかってこいよ」

「兄ちゃん……お前も喰種だったとはな……。しかも隻眼たあ驚いたね」

「ごちゃごちゃ言つてねえで来いよ。全員まとめて潰してやる」